愛知県東海市

柳が坪遺跡

高御前遺跡

松崎貝塚

1971

東海市教育委員会

愛知県東海市

柳が坪遺跡

高御前遺跡
松崎貝塚

1971

東海市教育委員会

序

本市は名古屋南部臨海工業地帯の造成以来、産業構造の変革と生活様式の向上に伴い、明るく豊かな住みよい理想郷土の建設をめざし躍進を続けています。

一方、都市化に伴う市域開発はいくたの埋蔵文化財を崩壊しつつある今日、私たちは、先人の歩んだ足跡に眼をむけてみる必要があります。

幸い本市には幾多の貝塚・古墳があり、祖先の生活をうかがうことができますが、今回その遺跡の一つである柳が坪遺跡を発掘調査し、出土品等の詳細な記録をのこすことは文化財の保護保存のみならず歴史・学術の上からもまことに意義深いものであります。

ここに柳が坪遺跡の報告書を発刊するにあたり、関係者のご協力を心より感謝申し上げるとともに、この報告書が少しでも皆様のお役にたつことを祈念して発刊のことばといたします。

昭和46年 5 月15日

東海市教育委員会

教育長　築　波　善　夫

例　　言

1. この報告書は、昭和44年の８月に発掘を実施した柳が坪遺跡の調査報告である。

2. 柳が坪遺跡は、知多半島でも代表的な弥生遺跡であり、すでに昭和27年に第一次の調査をおこなつたのであるが、このたび周辺の農地が土地改善の工事をされるにあたり、遺跡の保存の上で範囲と性格を明確にするために実施したものである。

3. 併せて先年、宅地造成の途中で遺構が発見されて、緊急調査を実施した高御前遺跡の報告を収録した。

   高御前遺跡は現在のところ、東海市で知られる遺跡の中で、縄文文化としてまとまつた唯一の遺跡である。

4. 一方、古代製塩遺跡として知られる松崎貝塚を調査したのであるが、発掘をゆるされた範囲からは、良好な形で生産の遺構を検出することができなかつた。

   本書には東海地方の古代製塩について概説をのべ紹介するにとどめた。

5. 本書の執筆は、以前の横須賀中学校教諭で、これらの発掘を担当した杉崎章氏（美浜町布土小学校長）があたつたのであるが、第一章ならびに第二章の２は本市の文化財調査委員の石川玉紀氏（横須賀中学校教諭）が分担し、さらに第四章の１は立松宏氏（半田市乙川中学校教諭）、おなじく第四章の２は磯部幸男氏（武豊町武豊小学校教諭）の担当であり、第六章の人骨については京都大学霊長類研究所の江原昭善・渡辺毅一の両氏に依嘱した。

   また本書の題字は東海市長岡島錦也氏から揮毫をうけたものである。

東海市教育委員会

目　　次

第一章　柳が坪遺跡の位置と付近の地形・地質 …… 1
1. 柳が坪遺跡の位置
2. 遺跡付近の地形
3. 遺跡付近の地質
4. 砂堆列の形成
第二章　調査の経過 …… 4
1. 遺跡の由来
2. 調査の日誌
第三章　遺　　跡 …… 9
第四章　人骨の出土状況 …… 12
第五章　遺　　物 …… 14
1. 土　　器
2. 陶器と中世土器
3. 石　　器
第六章　柳が坪遺跡出土の人骨について …… 22
第七章　総　　括 …… 25
付載第一　東海市高御前遺跡 …… 28
1. 位置・地形
2. 遺跡の由来
3. 高御前遺跡第二地点
4. 第二地点の遺物
5. 結　　語
付載第二　東海市松崎貝塚 …… 32
1. 松崎貝塚と東海市の製塩遺跡
2. 古代製塩遺跡の構造
3. 製塩土器の様式と編年
4. 後　　記

挿　図　目　次

第　一　柳が坪遺跡付近の地形図 …… 1
第　二　柳が坪遺跡の予備調査出土品 …… 4
第　三　柳が坪遺跡の第一次調査出土品 …… 5
第　四　柳が坪形土器 …… 6
第　五　柳が坪遺跡の調査状況 (1) …… 7
　1. 調査全景　2. 調査スナップ
第　六　柳が坪遺跡の調査状況 (2) …… 8
　1. 調査状況　2. トレンチ層序
第　七　柳が坪遺跡の調査トレンチと区域 …… 9
第　八　柳が坪遺跡のトレンチ層序 …… 10
第　九　柳が坪遺跡における人骨出土状況 …… 12
第　十　柳が坪遺跡人骨出土と調査状況 …… 13
第十一　柳が坪遺跡出土の弥生土器 (1) …… 15
第十二　柳が坪遺跡出土の弥生土器 (2) …… 16
第十三　柳が坪遺跡出土の中世土器 …… 19
第十四　柳が坪遺跡出土の石器 …… 21
第十五　高御前遺跡第一次調査の出土品 …… 28
第十六　高御前遺跡第二地点の出土土器 …… 30
第十七　高御前遺跡第二地点の出土石器 …… 30
第十八　東海地方製塩土器の変遷 …… 33

図　版　目　次

第　一　　1. 柳が坪遺跡の調査全景
　　2. 柳が坪遺跡の調査状況

第　二　　1. 柳が坪遺跡の人骨出土状況
　　2. 柳が坪遺跡のトレンチ層序

第　三　　1. 柳が坪遺跡の人骨頭部側面観
　　2. 仝、　上　面　観
　　3. 仝、　正　面　観

第　四　　柳が坪遺跡の出土品　(1)

第　五　　柳が坪遺跡の出土品　(2)

第　六　　1. 高御前遺跡第二地点（上段からみる）
　　2. 高御前遺跡第二地点（下段からみる）

第　七　　高御前遺跡第二地点の出土品

付　表　目　次

一　東海市付近の地質 …… 1

二　柳が坪人骨の各計測項目の比較 …… 23

三　高御前遺跡第二地点の出土土器分類 …… 29

第 一 章　　柳が坪遺跡の位置と付近の地形・地質

1. 柳が坪遺跡の位置

柳が坪(やなつぼ)遺跡は、東海市高横須賀町柳が坪および南形の地内にまたがつて位置しており、知多半島の西岸、伊勢湾に面して散在する弥生時代の遺跡の一つである。

名古屋鉄道常滑線・尾張横須賀駅下車、駅の東の高横須賀町の部落を南東へ向うと、広々とした田園風景が展開している。その前方には、標高20m～50mの丘陵が北から南へ延びているのが目につく。この丘陵の直下には、丘陵に並行して、三列の砂堆列が走つている。この砂堆列の中の海岸からかぞえた一番奥の砂堆に柳が坪遺跡が存在している。

2. 遺跡付近の地形

東海市には二つの丘陵が南北に縦走している。このうち、西部の丘陵は、名和町あたりから隆起しはじめ、途中、御雉子山(おきじやま)（海抜59.5m）を形成し、起伏して知多半島の骨格をなしている。この丘陵は海岸の侵蝕によつて、海蝕崖となり荒尾町加家にいたるまで、ほとんど海岸線に接して延びている。そして、加家付近で、走向を南東にまげ、大田川から信濃川にいたる間に、かなり広い平野部を形づくつている。南は、知多市八幡において、ふたたび海岸に接して、南へ延びている。

この南北約4000mの平野部は、過去において、浅い入江をなしており、沿岸潮流による砂州の堆積や、大田川・信濃川の三角州が合わさつて現在の海岸線が形づくられたものであろう。

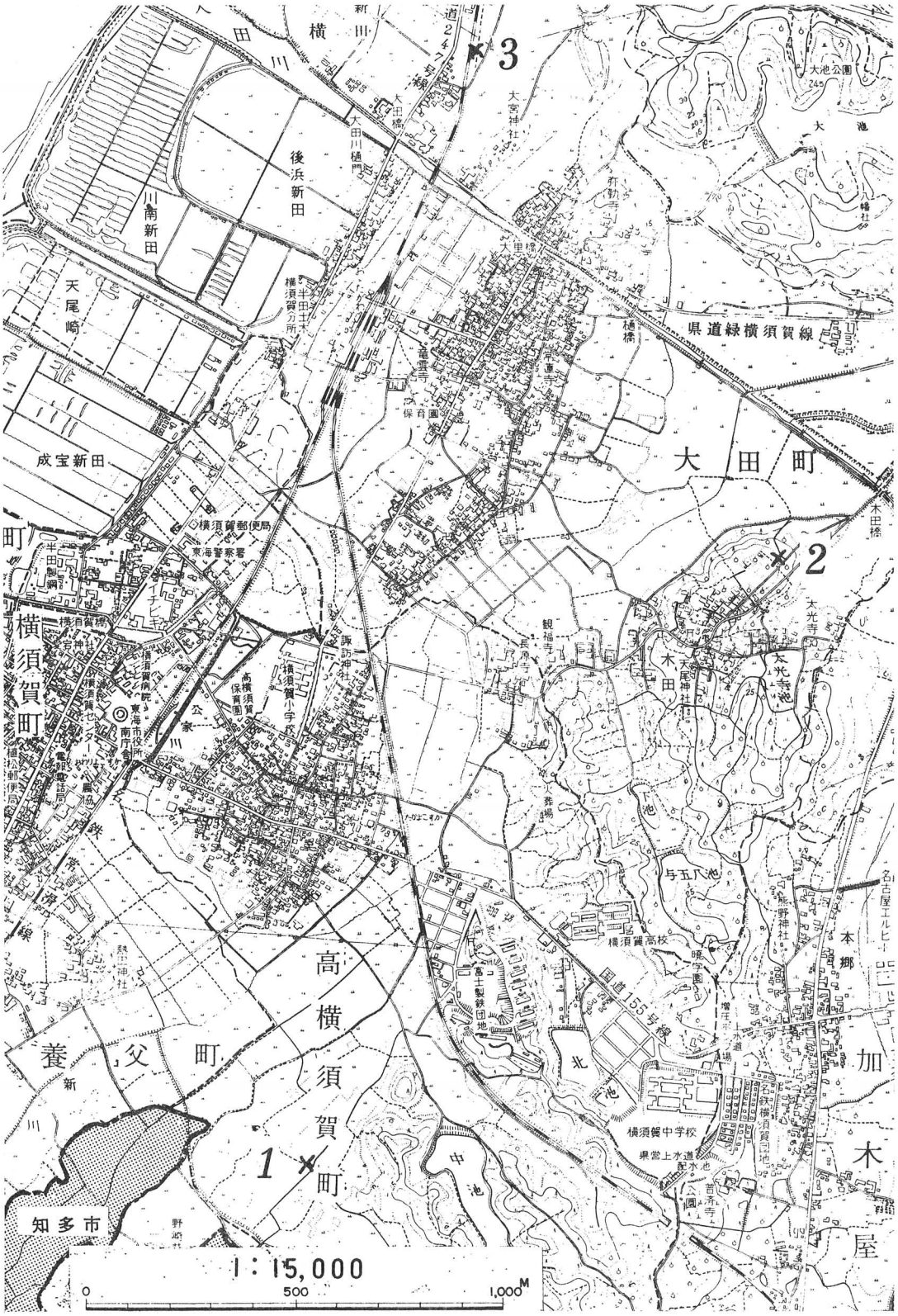
3. 遺跡付近の地質

知多半島の丘陵地に分布する地質は、新第三紀鮮新世の常滑層群である。これは下部の鬼崎層群と上部の三和層に大別される。すなわち鬼崎層は東海市付近では、丘陵の西側に分布しており、南部ほどよく発達している。また、知多半島基部においては、鬼崎層をおおつて、常滑層の上部にあたる60m～200mの地層が分布しており、これが三和層とよばれているものである。

天白川以南の知多半島西岸では、沖積層下に、旧海蝕台地がみとめられ、その上に沖積層が堆積している。

付表一　東海市付近の地質

時代	地層名			厚さ(m)	地層の特徴、岩層	分布、その他
更新世	加木屋層			5.0	チャート礫を主とする礫層 名古屋付近の八事層より粒は細かい	高さ50m内外の台地に分布し、東へ傾斜する
鮮新世	常滑層群	三和層		90.0	砂礫（チャート礫・半花崗岩礫）・シルトとそれらの互層 シルト層はピンクまたは黄灰色	東方に広く分布 大高、大府付近までつづく 東へ傾斜する
		鬼崎層	上部	55.6	緑色～黄灰色のシルト層が主、粗質の亜炭を含む 下部にチャート礫粗砂層あり	この地方の最下部に露出する 南部ほどよく発達している
			下部	69.5	青緑色シルト、砂質層からなり、亜炭、浮石、砂層を含む 植物化石わずかに産する	



挿図第一　柳が坪遺跡付近の地形図　　1.柳が坪遺跡　2.高御前遺跡　3.松崎貝塚

4. 砂堆列の形成

〃横須賀〃という地名は、中世の名であつた馬走瀬（まばせ）とともに、沿岸州を意味している。大田川から信濃川にいたる沖積低地一帯には、海底において堆積した沿岸州が、海水面の下降や地盤の隆起により、地上に姿をあらわした砂堆が、海岸線に並行して幾条も横たわつている。

砂堆が形成される諸条件の中で、中心となるのは、もちろん、その素地になる地形であり、この地域が入江であることが重要である。しかし、砂堆が形成されるためには、砂の供給がじゆうぶんでなければならない。供給源として、まず、考えられるのは、周辺の丘陵であるが、丘陵の自然風化や、それを侵蝕しながら流れてくる谷川の働きでは、とうていその必要量を満たすことができない。したがつて、それは潮流と木曽川の河流によつて他地域から運搬されたものと考えられる。

この地域における砂堆列については、海岸線と並行して走る砂堆列を、その序列から大別して三つに分類される。海蝕崖の方から順次東より西へ、第一・第二・第三砂堆とすれば、第三砂堆は干拓地を別にした現在の海岸線となり、知多半島の重要道路である常滑街道が通つて、その大部分は現在の中心市街を構成している。第二砂堆は大田町、高横須賀町のような農家を主とする部落が占め、南の方は畑になつている。さらに、第一砂堆はすべて畑地となり、最も小さい。

三列の砂堆列の形成過程については、海蝕崖の近くより、土地の隆起とともに、第一・第二・第三と逐次年代を追つて形成されたものと推定される。しかし、もつとも新しい第三砂堆の上でも東海警察署敷地内やイチビキ大津屋横須賀工場内など、弥生土器の出土した地点が知られており、場所にもよろうが年代的隔差はそれほど相違がなかつたものと考えられる。

そして柳が坪遺跡は、この砂堆列の第一砂堆上に立地している。

（石川　玉紀）

第二章　調査の経過

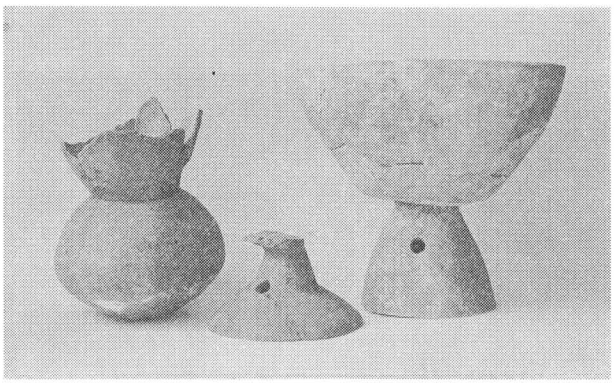
1. 遺跡の由来

ここ東海市の柳が坪や南形の地内に貝塚が存在することは、古くから大塚と呼びならわされていて、雨の日など付近が貝殻で真白になるほどなど、すでに相当の昔から人びとに知られていたのであるが、研究する人のないままに放置されていたのである。昭和の初めに横須賀小学校長を永年つとめられた成瀬涓先生も、この地域の一帯の遺跡踏査をしたが、遺跡の保存状態がわるく、中心と思われる地点が牛馬のつなぎ場とか、瓦レキの捨場となつているために、くわしい研究ができなかつたといつておられた。

柳が坪の砂堆とは小川で切れているが、おなじく第一砂堆で南へつづく知多市の野崎砂堆で、弥生式の石鏃が採集されていることから、東海市から知多市へつづく広い入江の奥に、初期の水田農耕の発祥地をもとめていたところ、昭和23年3月にいたり私は柳が坪遺跡の地表で、櫛目文の鮮やかな弥生土器の一片を採集したのであつた。横須賀中学の郷土クラブではこれに自信をえて、何度も現地を踏査し、遺跡を観察し、資料の増加をはかつていた。しかし貝塚とはいうものの、他の遺跡とはちがつてシオフキやウミニナが大部分であり、それらも粉末のようにくだけているものが多く、仕事は思わしく進んでいなかつた。

活動が一頓座しかけている時に、中学生の北川元志郎と伊藤明男の二人が遺跡をたずねた。二人は兎の餌となる草をとりにでかけた帰りといつていたが、たまたま遺跡の一部が掘りかえされており、それから30片ほどの弥生土器を採集してきたのである。その中で5片ほどは、私たちが夢にもわすれられない櫛目文様の資料であり、郷土クラブの面々は小おどりしてよろこんだものである。

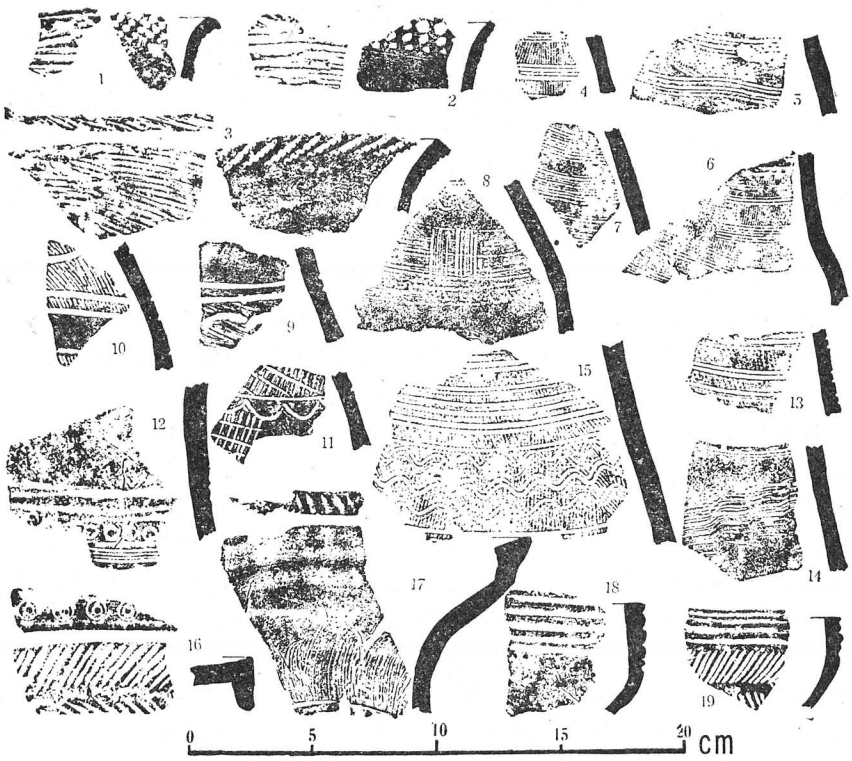
そのころ豊橋市の瓜郷遺跡を調査しておられた久永春男先生を知り、昭和26年の秋のことであるが、採集していた資料をみていただいたところ、弥生中期の古い段階のもので、三河地方にくらべて尾張では、この時期の研究が立ちおくれの状態であると指摘された。新年をむかえた27年の3月には久永春男を遺跡へ案内する機会をえた。遺跡の立地状態について具体的な現地指導をしていただいたものである。遺跡の奥の谷が、柳が坪の砂堆によつて出口をふさがれ、谷の全体が自然の後背湿地として沼地であつたころ、この湿地の周囲を初期の水田として利用し、砂堆の上に集落をつくつていたということである。そのころ、古代への幻想で興味一杯というだけで、学問的な素養をまつたくもち合わしていなかつた私たちにとつて、採集された数片の弥生土器をもととして、大昔の地形を復元し、祖先の生活を考察していくということは初めこの体験であり、本当の学問はこうしてまなぶものだと魅せられ、科学の世界へさそいこまれていくのを、どうすることもできなかつた。



挿図第二　柳が坪遺跡の予備調査出土品

これを機会として、この遺跡に対する私たちの理解は学問的の軌道にのせられ、同年5月11日、関係当局の了承をえて、久永春男先生のお弟子さんで、名古屋市熱田区の高蔵貝塚の調査をしておられる田中稔氏の応援をうけ、本格的な予備観察をおこなつた。遺物層の確認をす

るためである。予備調査としては1.5m^2のボーリングをおこなつたが、地表から20cmの純貝層、15cmの混土貝層につづき、60cmの黒色有機土層があつた。純貝層・混土貝層では、長床式を主とする弥生土器が古陶器と混在しており、黒色有機土層の底に竪穴があり、欠山式に属する弥生土器が良好な状態で数個体も検出（挿図第二）された。予備調査の成果に自信をえた私たち郷土クラブは、横須賀中学校長宮本勇三氏を発掘申請者にして、日本考古学協会員池上年氏を学術担当者に委嘱し、文部省文化財保護委員会へ発掘届をだした。地主や耕作者の承諾には元の町助役さんで郷土史研究の権威である久野九兵衛氏の奔走によつたものである。



挿図第三　　柳が坪遺跡の第一次調査出土品

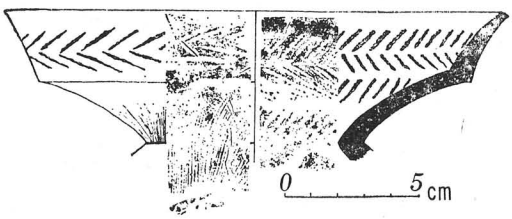
いわゆる柳が坪遺跡の第一次調査である。

期間は6月7日より1か月間であつたが、実際の発掘は6月7日より9日までの3日間とした。折り悪しく梅雨のころで雨にうたれながらも、クラブの生徒は張りきつて調査に加わり、分担した仕事をなしとげていつた。

調査の結果は、遺跡が砂堆の上に形成されているため、遺跡構造の点では住居址などといつた成果は検出できなかつた。貝層も中世の新しい時期のものであつた。この点、以前には柳が坪貝塚という名前をつかつたものであるが、ほかに知多半島の弥生遺跡では貝塚をつくつている例はなく、柳が坪でも弥生時代は貝塚でないことがはつきりした。そこで間ちがつてうけとられることを恐れ、現在では柳が坪貝塚という表現はつとめてつかわれないでいる。遺物については弥生式の単独ベースから出土した量はそれほど多くはないが、上部の各層から中世陶器と混在して検出されたものを加えてみると相当の量である。名古屋市の高蔵貝塚や西志賀貝塚で編年された尾張地方弥生土器の体系に、三河の瓜郷遺跡の成果を加えた知見から検討してみると、もつとも古く年代をさかのぼりうるものは、貝田町式あるいは類似のものである。ただ私たちが発掘において貝田町式の層序をみとめたというのではないので、実際に貝田町式の時期があつたのであるか、次の外土居式の中に土器様式の伝統がのこつたのであるか、断定は困難である。

柳が坪遺跡の第一次調査を実施してのち、南へつづく知多市の野崎遺跡や獅子懸遺跡を調査し、縄文文化圏の中から新しく農耕文化の洗礼をうけた続水神平式（野崎第一群）文化が発生し、つづ

いて知多半島は名古屋台地の貝田町式文化圏をとりかこむような形で、瓜郷式（野崎第二群）の文化圏に入り、やがて知多半島を中心として西三河地方までを包含した獅子懸式（野崎第三群）へ展開するという、西知多の弥生文化の発展が知られてきた。南知多町における磯部幸男氏の研究が実をむすび、さらに美浜町野間では服部秀雄・立松宏両氏の努力により、高田遺跡の構成が発表されるなど、知多半島における弥生文化も、その実態の解明が急速にすすめられているのであるが、柳が坪遺跡の研究は、知多半島弥生文化の歴代遺跡として、その黎明期を代表したもので、考古学の研究史上に名をとどめるべきものである。



挿図第四　　柳が坪形土器

叙述の順が前後したきらいもするが、ここで、いわゆる柳が坪型土器についてふれておこう。私たちが柳が坪型土器として扱つたものは、稜をつくつて上方に折れ立つた口辺部の内外面に櫛目の羽状文をもつ壷形土器を、メルクマールとしたものである。田中稔氏とともに実施した予察において、欠山式に属する大小それぞれ２個の壷形土器や高坏形土器とともに、この土器の良好な資料（挿図第四）をえて提唱したものである。当時、久永春男先生は三河湾内の島々と、その沿岸の渥美半島における貝之浜貝塚や、知多半島の先端部に分布しており、瓜郷遺跡では莫大な量の資料の中に２・３片をみるにすぎないと教示された。そのご私の調査した日間賀島新井浜貝塚や、磯部幸男氏の調べた南知多町師崎の神護寺遺跡では、欠山式に属する層位と、土師器と混在する層位と、わずかに施文の簡略化という変化をみせて、まとまつたこの型の資料が発見された。この型の資料は、おなじ器形でも施文の省略されたものは土師器として継続されており、土器の大小もさまざまである。分布の範囲も末端は相当にひろがりをみせ、尾張平野でも一宮市付近とか、さらに志摩国では答志島でもみうけられている。

（杉　崎　　章）

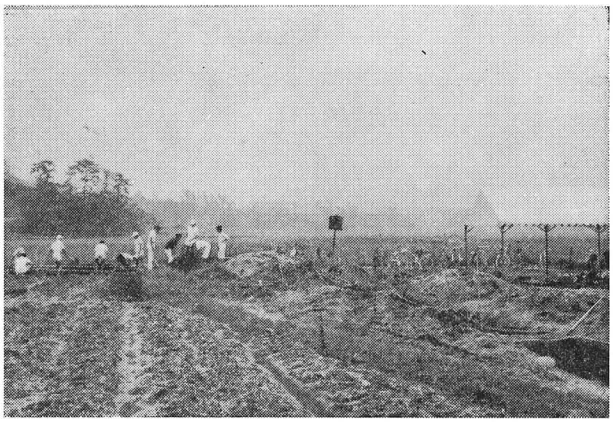
2. 調 査 の 日 誌

5月25日（日）　曇ときどき雨のあいにくの天気であつたが午前10時に現地へ集合した。杉崎章氏の指導のもとに、立松宏氏ほか数名のもので、発掘調査の打ち合わせをした。現地の状態から考えて、日曜ごとの調査はやりにくいので、次の6月1日（日）に予備調査を集中的におこない本格的な調査は日をあらためて2～3日間をかけておこなうことに決定した。正午ごろ解散した。

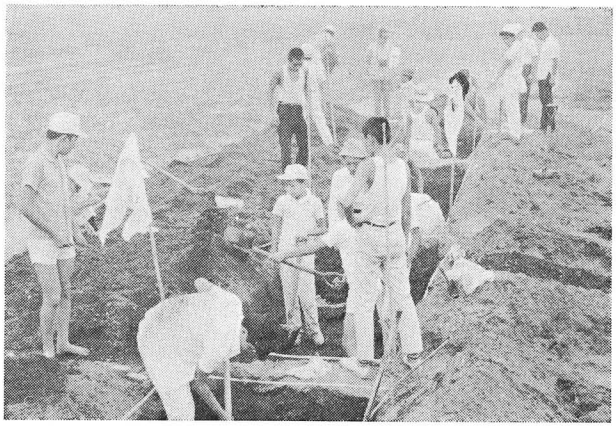
5月26日（月）　教育委員会の佐々社会教育課長に、打ち合わせの結果を報告に行く。発掘予定地の地主に対する了解を得ていただくことと、県教委・文化庁等あての書類についても依頼する。

5月31日（土）　遺跡発掘を明日にひかえて、横中郷土クラブの集会をおこなつた。クラブ員に対して、発掘調査の概要をプリントして配布し、発掘調査に参加する心がまえを指導するとともに、必要な用具の準備をした。

6月1日（日）　横中郷土クラブ員は学校へ9時に集合した。15名のクラブ員が用具を分担して、自転車につみ、現地へむかう。現地で、すでに到着しておられた杉崎章氏より発掘の目的、方法について指導をうけ、調査についての意見をのべあつた。そして、いよいよ作業にとりかかつた。まず、幅2*m*で長さ6*m*のトレンチを設定するために、綱張りをした。そして、いよいよ発掘にとりかかつた。表面は、ごみすて場になつていたところもあつて、土を掘りだすのに、非常に困難であつた。下の方は砂地になり、楽に掘りあげることができた。途中の貝がらにまじつて、いろいろの土器片が多数みつかり、興味ふかく作業をつづけることができた。少数ではあるが、石器類、骨類もみつかり、午後になつて、人骨らしきものが一部発見された。人骨は黒色土層の基盤にそつて遺存の状態も良好であり、簡単には調査できないこと、さらに周辺の畑の耕作物の関係もあつて、本調査を夏休みにもつことに申し合わせた。



1．調査全景



2．調査スナツプ

挿図第五　柳が坪遺跡の調査状況 (1)

6月18日（水）　市役所北庁舎でおこなわれた、市文化財調査委員会で、6月1日実施の予備調査について報告した。

8月20日（金）　市役所北庁舎で行われた、市文化財調査委員会で、8月25日～27日に行う予定の発掘調査について説明をした。

8月25日（月）　発掘第1日目

現地へ9時に集合する。杉崎章氏をはじめ、立松宏・磯部幸男・猪飼英一・宮川芳照・大下武各氏のほか、東海市文化財調査委員会の加古重光委員長、片田秀一委員をはじめ委員の方々も多数参加さ

れ、協力をしていただいた。横中郷土クラブからは30名のクラブ員が参加し、他に名古屋市立工芸高校郷土クラブ員3名も応援参加された。

はじめに、杉崎氏より本日の計画についての説明を聞いた。本日のおもな仕事は、東西に幅1.3m、長さ3mのトレンチを6か所設定し、それを掘りだすことである。5～6名ずつの班を編成し、各トレンチの分担をきめ作業にとりかかつた。

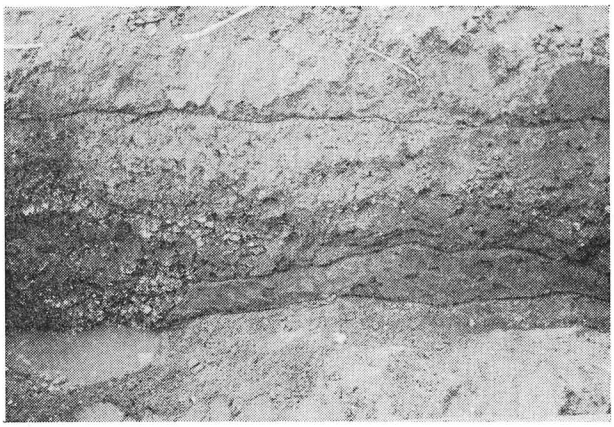
それよりさき、テントを張り、用具の整とんをして、作業の段取りをした。学校から現地までのテントや用具の運搬など面倒な雑事については、本市養父町に在住の石川米治氏に絶大なる協力を得た厚く感謝したい。

発掘していく間に発見した土器類、石器類、骨類などはそれぞれビニールの袋に入れるようにした。

さきの予備調査で発見された人骨は、東端のトレンチで再び姿をあらわし、宮川氏が中心となつて、念入りに調査がすすめられた。

昼すぎ、各新聞社の記者が現地を訪問され遺跡調査について取材された。

1. 調 査 状 況



2. トレンチ層序

挿図第六　柳が坪遺跡の調査状況 (2)

午後は、午前中の各班の仕事をつづけておこない午後4時ごろ作業を終わり、本日の調査の成果と明日の予定を話し合つて終了した。

8月26日（火）　発掘第2日

昨日と同じメンバーが午前9時に集合、杉崎氏の指揮のもとに一せいに作業にとりかかつた。東西トレンチについては人骨の調査以外は、昨日で発掘調査を終わつたので、本日は南北トレンチを、同じ要領で6か所設定し、各班別に発掘をすすめることにした。東西トレンチの場合と同様、発掘地点ごとに、土器類、石器類、骨類をビニール袋に入れるようにした。

人骨については、本日は更に調査をすすめ、実測図作成など計測を詳細にわたつておこなつた。午後も同様の発掘および調査をすすめ、記録を取り終つたトレンチから、埋める作業にかかつた。

各々のトレンチを埋め、道具の整理、発掘した物の整理、テントの片づけを終つたら午後4時ごろであつた。

8月27日（水）　午後　調査に参加したもの全員が、横須賀中学校に集合、発掘地点ごとに袋に入れてある土器類、石器類、骨類を、水洗いする作業を行つた。洗い終わつたものから中世陶器、弥生土器、石器に分類し、報告書の執筆分担を決定した。

9月17日（水）　市役所南庁舎において、市文化財専門委員会が開かれ、杉崎氏より、スライドを使つて、柳が坪遺跡発掘調査の報告がなされた。　（石川　玉紀）

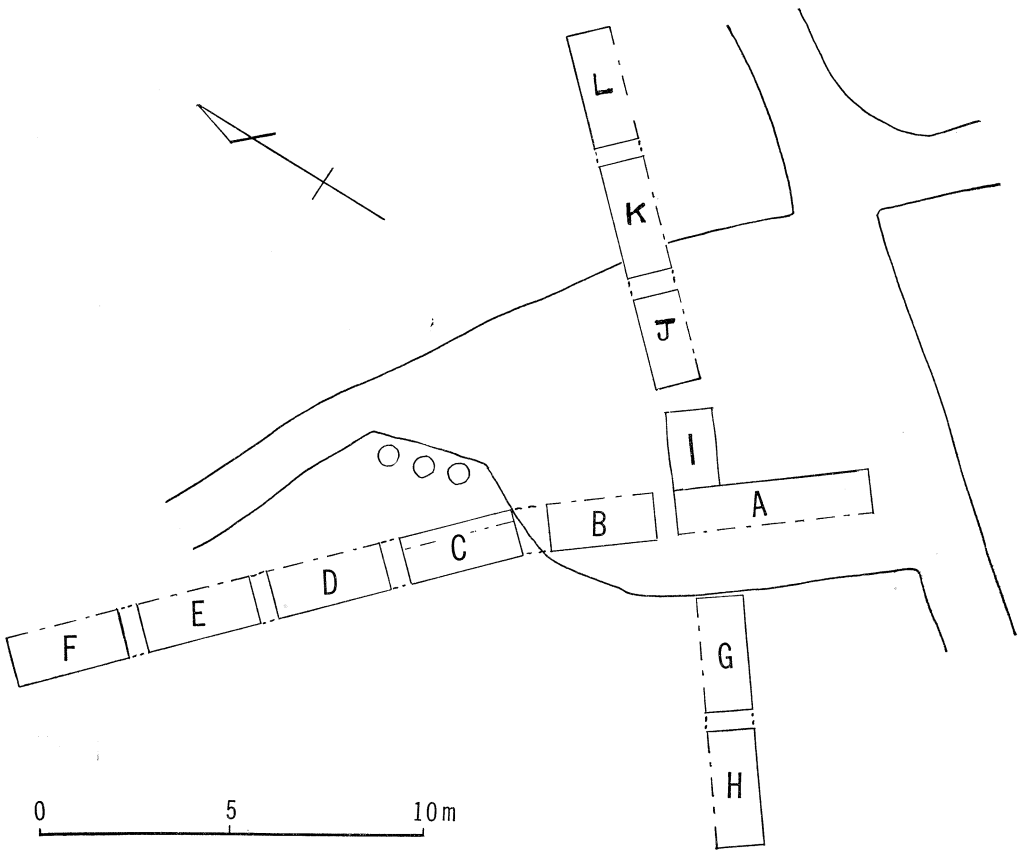
第三章　遺　　跡

以前から遺跡の中心といわれていた地点に設定した試掘坑を仮りにA区とし、まずA区を西へ延長する第一トレンチを設定、ついでA区の両側に第二、第三トレンチを発掘した。すなわち第一トレンチは17.5mの延長で、長さ3mの発掘区B・C・D・E・Fをそれぞれ50cmずつ隔壁をもうけたものである。そしてA区の南には長さ7mの第二トレンチを、おなじく50cmずつの隔壁をへだててG・Hの両区にわけてすすめたものであり、反対の北側には長さ13mの第三トレンチをI・J・K・Lの4区にわけて調査した。

各発掘区を通じて基本的な層序は、表土層→混土貝層→黒色有機土層→黒褐色有機土層とすすみ、基盤は黄褐色の砂層となつている。

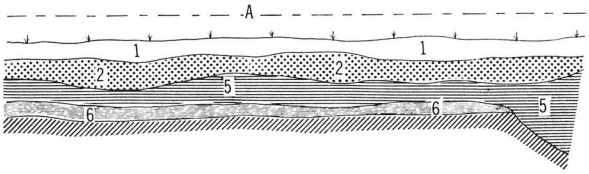
表土層は、各トレンチとも10～20cmの厚さで、東へ約5度の傾斜で低くなつているが、もともと砂堆の中央部は微高面をなしており、東西の両側へ低くなつた地形であり、この地形の東側にある水田に接した縁端部に遺跡が立地しているため、当然なことであろう。

混土貝層は、約20cm程度である。シオフキやウミニナを主体とし、ハマグリ・カキ・タニシを多くまじえ、アカニシ・オオノガイもふくまれており、第一トレンチの西より付近では露頭の部分もみられる。貝層は地点にもよるが、よく破砕されている。遺跡の発見当初は貝層の分布が注目さ

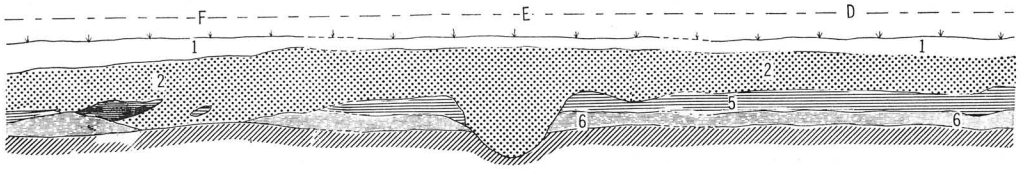


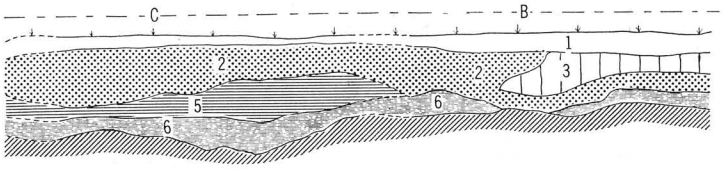
挿図第七　　柳が坪遺跡の調査トレンチと区域

試掘トレンチ南壁



西トレンチ北壁

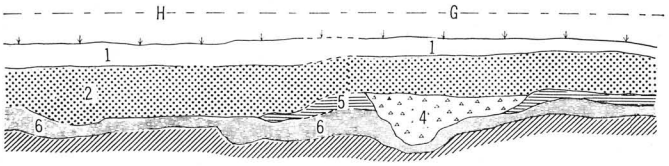




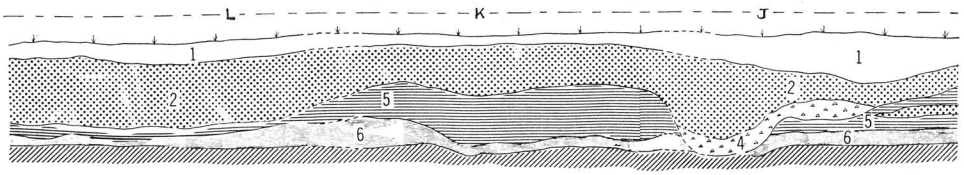
凡例

1. 表土層
2. 混土貝層
3. 褐色土層
4. 純貝層
5. 黒色有機土層
6. 黒褐色有機土層

南トレンチ西壁



北トレンチ東壁



挿図第八　柳が坪遺跡のトレンチ別層序

れ、貝塚として衆知のものとなり、この遺跡でもつとも先行する弥生土器とむすばれて解されたため、弥生時代における柳が坪遺跡は貝塚を呈していたという誤認をうけるもとになつたものである。調査の結果は、知多半島古窯址群の製品である甕・壷・鉢・山茶碗・山皿といつた中世後葉を中心として、古瀬戸後期のものもまじえた近世初頭にいたるものも混在しており、弥生時代の遺跡としてはまつたく無関係の層であつた。

そして混土貝層の下にみられる有機土層には上下の2層があり、上層の黒色有機土層は、この遺跡における層序としてはもつとも厚く、平均して約50㎝程度の堆積がみとめられる。遺物は弥生土器がほとんどであるが、含有量は比較的少ない。しかしながら第一トレンチ中央部のC・D区をはじめ、第二トレンチのG・H区などでは、中世土器の資料も検出されている。第一次調査の時には、この層も弥生文化期の堆積と考えていたことと、44年3月の試掘の時の調査区では中世土器がみられなかつたことから、発掘の過程ではこの層から出土した人骨を弥生人骨と考えるまちがいのもとになつたのである。鎌倉時代のころの、貝層がいまだ形成される以前に堆積した層序である。

下層の有機層である黒褐色有機土層は、ところどころ黒色有機層や、さらにその上の混土貝層で攪乱されているが、この層こそは弥生文化期のベースである。とくにその基盤に近い床面の底面では、この地方で弥生中期の前葉土器に比定される獅子懸式の土器が多くはりついて検出された。しかし黒褐色有機土層の全体としては、出土した遺物の中に弥生中期後葉あるいは後期初頭の長床式ないしは寄道式の土器もみられ、弥生文化期の中ではある程度の上下攪乱を想定せざるをえない状態である。

昭和27年の第一次調査の時のような弥生後期末葉の欠山式にふくまれた柳が坪型土器のピットは、今度の調査においては発見できなかつた。およらく砂堆上の遺跡であるため、竪穴の形で独立して存在するものであろう。

次に各トレンチごとの遺跡の状態について、層序の概要をのべよう。

試掘トレンチにおいて、その西端で中世前葉の黒色有機土層が深くおちこみ、弥生文化期の黒色有機えを切りわつている。このピットは、東北よりにのびて、北方約2mのところで底面にはりついて完全な人骨を出土した。西につづく第一トレンチ西端に近いE区で、中世後葉の混土貝層が黒色ならびに黒褐色の有機土層をわつておちこむピットがみられた。貝層の堆積も第一トレンチの西の方が厚い堆積をみせている。弥生文化期の堆積である黒褐色土層についていえば、第一トレンチ全体を通じて10～15㎝であつて、ほとんど変化はないのであるが、西半へいくと出土量がわずかとなり、弥生土器の出土についていえば、B・C区が圧倒的な量をみせている。

第二トレンチ・第三トレンチについてみると、混土貝層の貝はとくに破砕度が高い。北へ延長した第三トレンチのJ・K・Lの発掘区においては、すべての層に遺物の出土量がへつている。南方へ設定した第二トレンチについていえば、A区につづくG区において黒褐色有機土層の中から弥生土器の出土が目立つている。

長年の風雨にさらされた砂堆上の遺跡とて、遺跡堆積の状態はかならずしも良好とはいえない。とくに遺跡のある柳が坪砂堆の上が、中世以来ひきつづき近世はじめにいたるまで、東海市高横須賀の村の元部落の位置であり、遺跡の北方 300mのところは神社のあととも伝えており、弥生時代の遺構として良好な状態をのぞむべくもなかつた。

今次の調査においては、中世後葉から近世初期における混土貝層、さらに中世前葉の黒色有機土層、そして弥生文化期のベースであつた下層の有機土層、すなわち黒褐色有機土層の堆積を明らかにしたものである。

（杉　崎　　章）

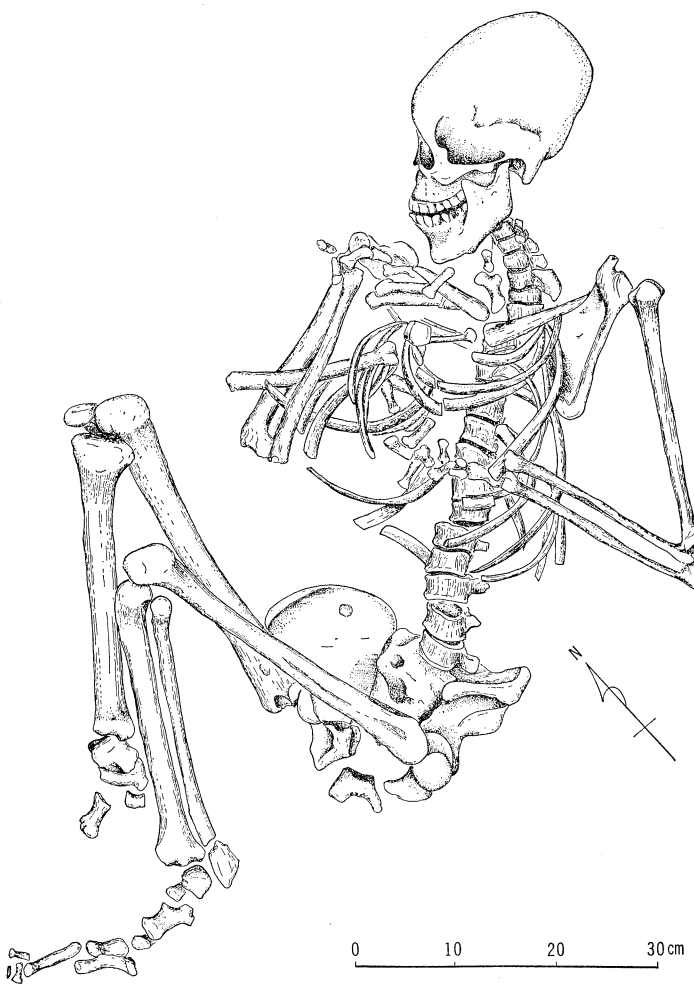
第四章　人骨の出土状況

人骨は、第三トレンチの最下層から検出した。遺体埋葬の施設としての小判形状のピットが、黄褐色有機砂土層ならびに基盤の砂土層にとおして掘り込まれ、中には黒色の有機砂土が充満していたが、軟弱な砂質土層のために、その全容を復元することは至難であつた。

人骨は、頭骨を東北東にとつており、黄褐色をして骨質も保存がよく、ほぼ完全な状態で検出した。

埋葬位は、仰臥屈膝葬位である。頭骨は、右横臥で、歯牙の欠失はみられず、咬合面の磨耗度も少なくて保存がよいが、下顎左臼歯に虫歯がみられた。抜歯はない。

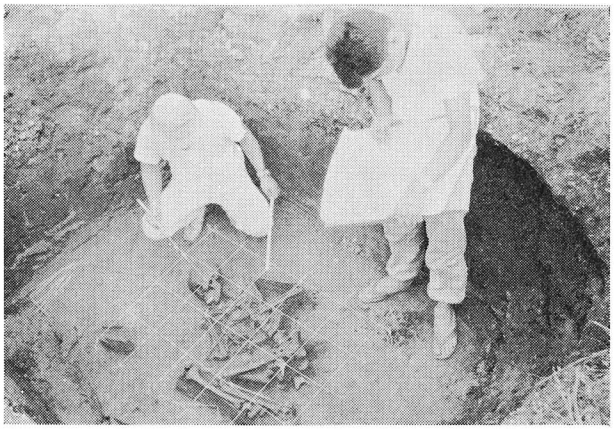
右の上腕骨は折り曲げられて、手掌が、右上の胸部に、左の手掌は上腹部に置かれていた。
大腿骨は、右横に屈膝して、その上に左大腿骨が重なるようにして倒されていた。



挿図第九　柳が坪遺跡における人骨出状土況

この人骨に対する副葬品や、身体装飾品などの伴出品はなく、ただ埋葬時に混入したとみられる弥生式の甕形土器と壷形土器の細片が数片出土したにとどまり、人骨の周囲や床面における施設、遺構の類は検出できなかつた。

（宮川芳照・大下　武）



挿図第十　　柳が坪遺跡人骨の出土と調査状況

第五章　遺　　物

1. 土　　器

縄文土器

口縁部を折りかえし肥厚させた複合口縁の土器1片と、口縁に太い粘土紐をめぐらし、区画をつくつて区画内を施文した文様構成をもつたもの1片の計2片が出土した。粘土は粗砂を混じ、しかも磨耗著しく、判然とはしないが加曽利E式に比定される縄文中期の土器と考えられる。

弥生土器

出土した弥生土器は、弥生土器のベースであつた黒褐色有機土層をはじめ、表土層ならびに混土貝層や黒色有機土層の中から出土したもので、弥生中期を主体とする土器が混在していた。したがつて層序による分類はできなかつたが、用途によつて壷形土器、甕形土器、その他に分け、さらに施文方法、施文具、製作手法、焼成度等によつて4類に分類した。

(1) 壷形土器

第Ⅰ類　口辺部は強く外反して末端で垂直にたちあがり、端面は薄くとがる。頸部から上胴部にかけて斜格子状に鋭い篦状器具によつて施文されたもの、2本の平行線の内側に刻み目を施したもの、半弧状の沈線や不規則な篦書き文の組み合わせなど、いずれも篦状器具によつて力強く施文されたものの一群である。瓜郷式に近いものである。（挿図十一の1～11）

第Ⅱ類　第1類が篦状器具によつて施文されるのに対して、第Ⅱ類は櫛状器具やアナダラ属の貝殻によつて施文されたもので、量は最も多い。第Ⅱ類はさらにA、Bの2種に分類される。

A、口辺部が強く外反して水平に近く、端面の下端に刻み目を入れ、端面には2条の浅い沈線をめぐらしたもので、朝日式土器の伝統を受け継いだもの。（挿図第十二の42）

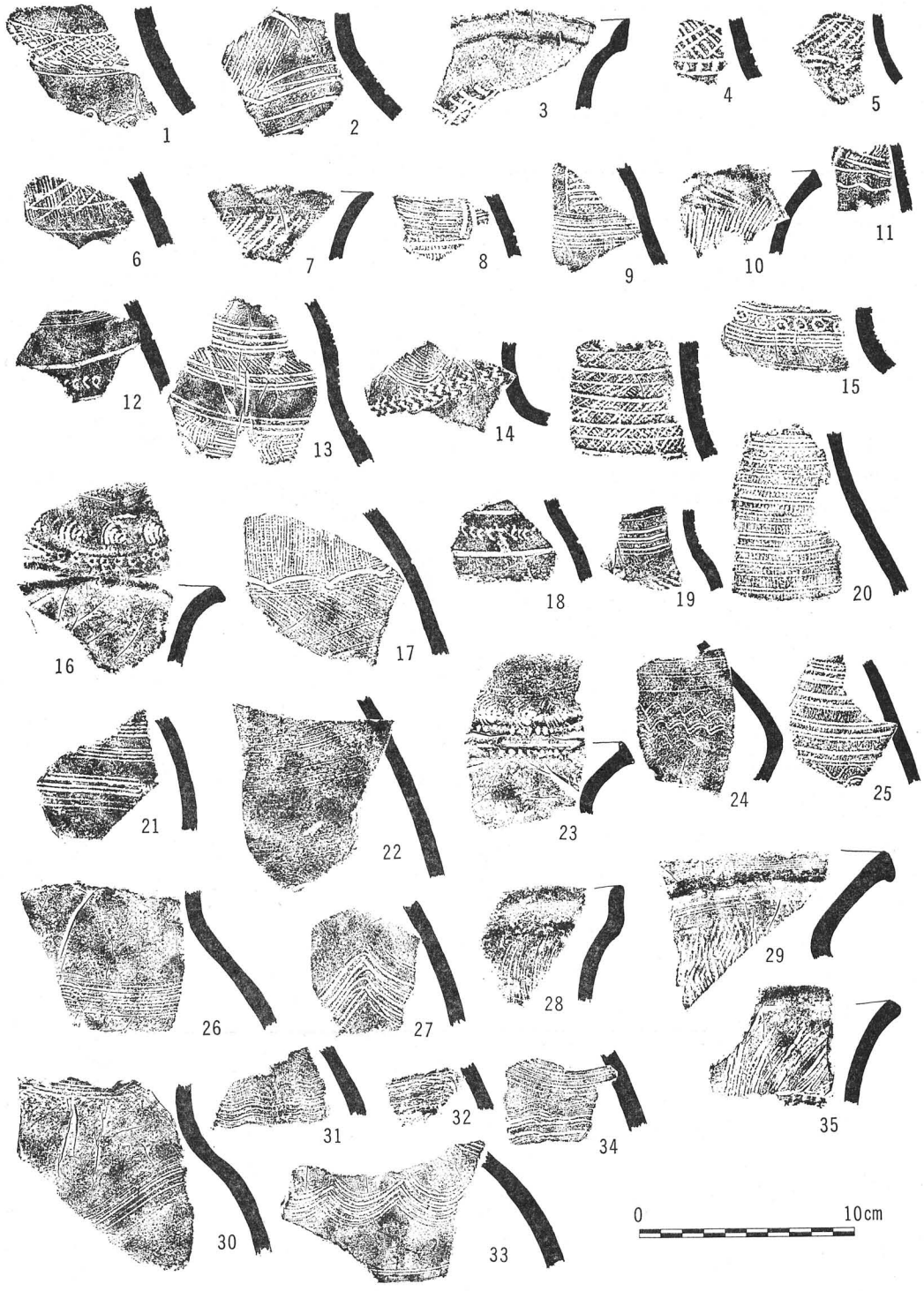
また、頸部から上胴部にかけては、2条1組と思われる櫛状器具による櫛目文を横に配して、縦位の整形状櫛目を切つたり（挿図第十一の20）その下部に波状文を配したり（挿図第十一の24、25）竹管文（挿図第十一の15）やアナダラ属の貝殻の腹縁による押引文（挿図第十一の14）刺突文（挿図第十一の12、18）などがある。また、擬流水文を配した精製土器もみられる（挿図第十一の13）これらは総じて外土居式に類似したものである。

B　口縁端面はゆるやかに外反してやや肥厚し、頸部は篦状器具による斜線を加えたり、（挿図第十一の35）口縁部はゆるやかに外反して肥厚し、端面に細い沈線を数条めぐらし、頸部は篦状器具によるはねあげ文を斜めに施したもの。（挿図第十一の28、29）胴部は細い櫛状器具（松葉の先端を束ねたごとき）で横帯文や波線を入れたり、さらに頸部には細かい波線や押引文を施したりしたもの（挿図第十一の22、26、27、30～34）もある。この種の土器は焼成が堅緻で、炭素を多く吸収して黒色を呈するのを特色とする。獅子懸式とよばれる土器である。

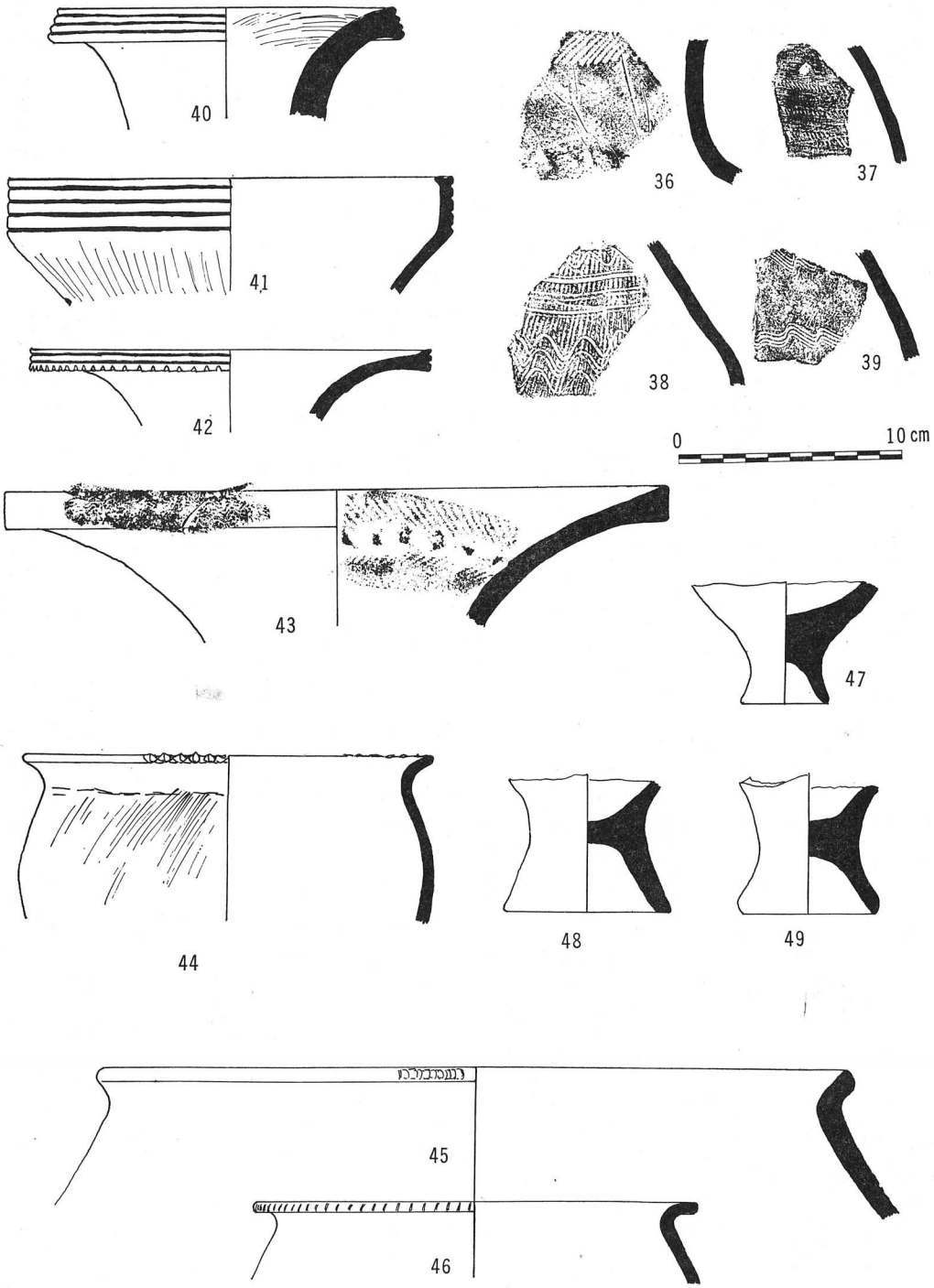
第Ⅲ類　外反した口縁部は上方に折れ曲るか、強く外反した口辺部の端面を押しひろげ、いずれも太い沈線を端面や外側に3条ないし4条めぐらす。胴部は櫛状器具による横線帯をもつものと思われる。（挿図第十二の40～41）2個体分出土した。長床式に類似した土器と思われる。

第Ⅳ類　口辺部はゆるやかに外反し、端面は直角に面取りされ、その両端に小圧痕を加えたもの（挿図第十一の23）、口唇部に竹管文を配したもの（挿図第十一の16）などあるが、口縁内面に扇形重弧文を連続的に配したものなどがある。（挿図第十一の16、23）

また、櫛状器具による刺突文を並べるのを特色とし、口縁内部に円錐状突起列をめぐらし、大きく外反した口縁端面には櫛状器具による波状文を配す。（挿図第十二の43）



挿図第十一　　柳が坪遺跡出土の弥生土器 (1)



挿図第十二　　柳が坪遺跡出土の弥生土器 (2)

また、胴部は研磨し、数本の細い櫛状器具によつて細かい鋸歯文と丹彩を施したものなどがある。（挿図第十二の37）寄道式（旧）と考えられる一群である。

(2) 甕形土器

壷形土器にくらべて出土量が少なく、器形を察するに足るものは3個体にとどまつた。胴部はややふくらみをみせ、口縁部は外反して、胴部は無文、口縁端面に5ないし6個の連続圧痕をもつもの。この連続圧痕は4か所と考えられ、壷形土器の第Ⅱ類とセットになるものと考えられる。（挿図第十二の44、45）

口縁部は強く外反して水平に近く、端面には櫛状器具による圧痕を加えたもの(挿図第十二の46)で、壷形土器第1類、第Ⅱ類とセットになるものと思われる。

また、台付甕の台の部分のみ3個体出土したが、壷形土器第Ⅲ類、第Ⅳ類に伴う甕形土器であろう。

その他

極めて細片ではあるが、口縁部を外方へ水平に折りひろげて、鍔状につくつた高坏形土器と思われるものが出土した。第Ⅱ類の壷形土器に組み合わされるものであろう。

（立　松　　宏）

2. 陶器と中世土器

表土層から混貝土層にかけて包含されていた中世の土器は、製作された年代や生産地によつてつぎのように分けられる。

すなわち、平安時代末葉から室町時代にかけて、知多半島の丘陵で生産された陶質土器の諸製品と土師質の土器。室町時代から江戸時代初期にかけて、瀬戸地方で生産された碗や釜、小形長頸壷などである。

甕　(挿図第十三の1～5) 破片であるが8個体分の資料を採集した。口縁部がするどく外反し、口端内側に一条の沈線をめぐらしたもので、器内の肩部と頸部の接合部には輪積みのあとを、またその外面には櫛状の器具による整形のあとをのこしているもの(挿図第十三の1)外反した口縁の口端が1.5cmの幅を有する縁帯をなすもの(挿図第十三の2)口縁部がN字状に折りかえされ、口縁から短い頸部にうつり胴部へなだらかにつづく器形をなすもの(挿図第十三の3～5)がある。

壷　(挿図第十三の6)　一例のみの出土である。口縁部は直行し、口端は折りかえしているがN字状をなさず、肥厚して玉縁状をなすもので、口径は15cmである。

鉢　(挿図第十三の18～20)　4個体分の資料が出土した。内彎する口縁部の口端に幅1cmの流し口を有するもの(挿図第十三の18)、口縁部のみの出土であるが、幅約3cmの流し口をもち高台を有する片口鉢もみられる。口径33cm器高15cm、底部の径17cmで、底部から口縁にかけてほとんど胴張りのみられない鉢で口端部に一条の沈線を有するもの(挿図第十三の20)もある。

山茶碗　(挿図第十三の7～11) 断面が三角形をなし高さ0.7mm前後の整形された高台を有するもの三例、ひしやげて低くなつているが、断面三角形をなし籾殻痕のある高台を有するもの四例、高台のないもの五例の資料をえた。ほかに底部の径8.5cmで角高台をなすもの、底部の径9cmで、高さ1cmの断面三角形をなす高台をもつものがある。底部のみの資料であるが、腰部へかけての立ち上がりから大碗と考えられるものである。

口径15cm、器高6cm、底部の径7cm、器壁の厚さは不ぞろいであるが、胴部から腰部にかけてわずかに張りの見られるもので、ひしやげて低くなつているが、籾殻痕のある断面三角形をなす高台を有する(挿図第十三の7、8)。挿図第十三の9～10の例は器高やや低く、底部は糸切りのままで高台をもたず、口縁から底部にかけて器体が直線的になるものである。ほかに一例であるが、胎土がち密で黄白色のなめらかな器形をなす薄手の山茶碗がある。口径13cm、底部の径5cm、器高4.2cmとやや小形で籾殻痕のある断面三角形をなす高台が付されている(挿図第十三の11)。

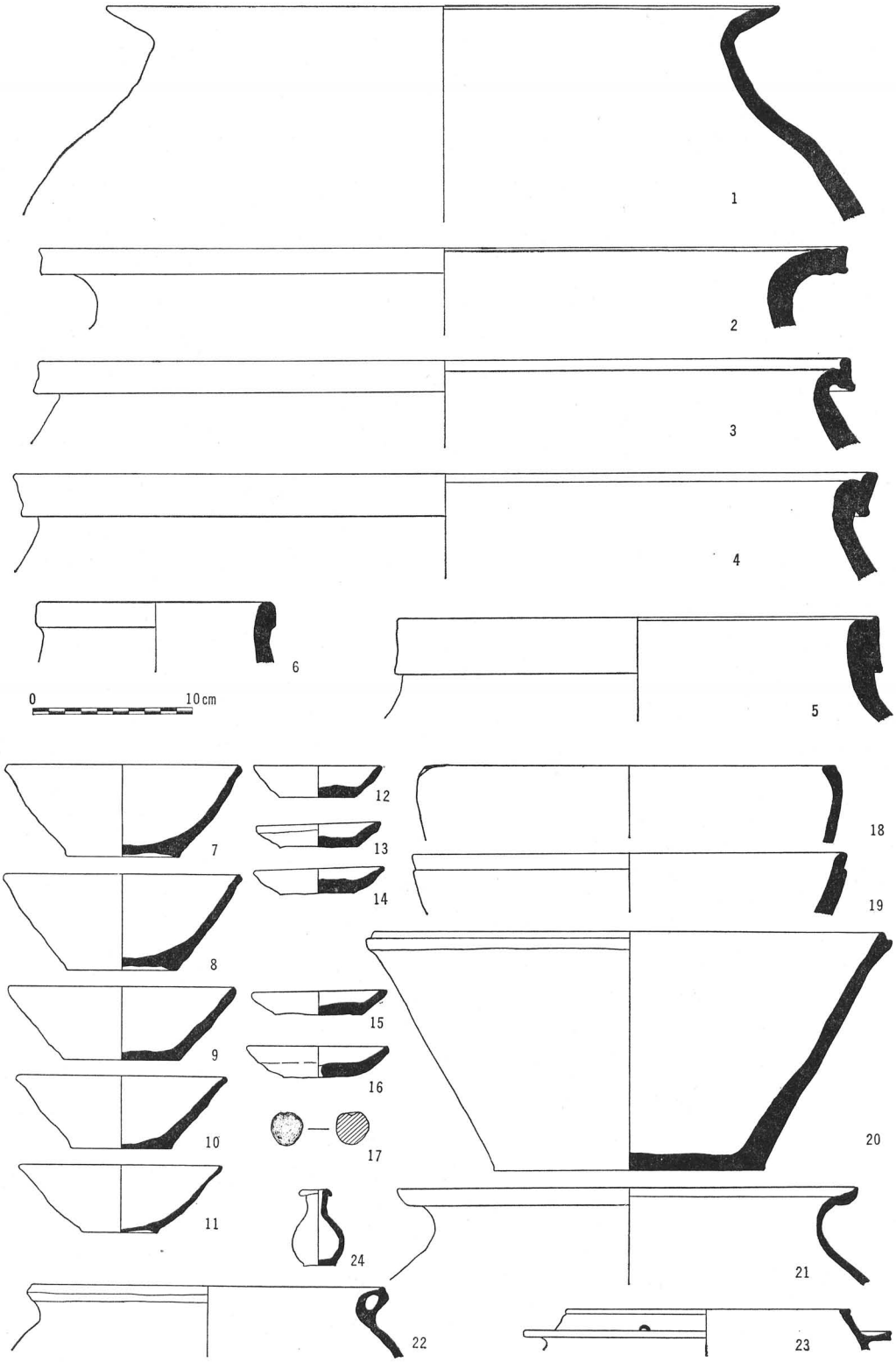
山皿　(挿図第十三の12～16)　直径6cmの糸切りの底部に径5.5cmの断面三角形をなす高台を付したもの一例のほかはすべて底部に高台のないもので、十六例を数える。これらには口径8cmのものから10cmのものまであり、器高は2cm内外のものが多い。なかに1.8cmと低くなるものがあり、器壁が厚く、口径に対する底部の径の比が増したものがある(挿図第十三の13～15)。

なお、口径9.5cm底部の径5cm、器高2cmの皿で、底部の中心に内側から径5cm前後の棒状のもので刺突して穴を穿つたものがある(挿図第十三の16)。また胎土がち密で黄白色を呈し、口縁部が外反し下胴部に胴張りがみられ、底部が厚く外方に張り出した山皿が一例みられる。

陶丸　(挿図第十三の17)　径2cmのほぼ球形をなしているが、上部に約径1cmの面をつくり径5mm、深さ2mmほどの小穴を穿つている。

土師質の甕　(挿図第十三の21)　口径31cmで口縁部は外反し、口端は折りかえして肥厚している。器壁は4cm前後で薄手な作りである。二次的な火焔を受け、器体表面は黒色を呈している。

内耳土器　(挿図第十三の22)　口縁部内側に耳を有した土師質の土器である。内耳は2個あり、粘土をつけたあと、棒状具で横に直径8cmの穴を穿ち、整形したといつたかつこうで、耳の幅は



挿図第十三　柳が坪遺跡出土の中世土器

1.2cm前後である。胎土はち密で薄手な作りで肩部から胴部にかけて擦痕がみられる。口端部は外側に折りかえし肥厚させている。

ツバ付土器　(挿図第十三の23)　口縁から1.5cm下がつた外側にツバをめぐらせており、いわゆる土釜形の土師質土器である。口縁部は内彎し、口端は折りかえして外方へ肥厚させ、頂部は水平に仕上げられている。口縁部に径5mmの小孔があるが、口縁部のみの部分的な資料であるため小孔の数は知ることができない。なおツバより下方は釜ズミがつき黒色を呈している。

小形長頸壷　(挿図第十三の24)　器高4.8cm、底部の径2.1cmをはかり、口縁は一たん引きあげたものを折りかえして作り、頸部から肩部にかけてなだらかな線を描きながら、最大腹径3.4cmをはかる下胴部にいたる小形長頸壷である。全体にうわぐすりをぬりつけ白緑色を呈している。

ほかに、削り出し高台を有する白磁碗と思われるものの底部二例や、柿色や黒色をなす天目茶碗の土器片五片が出土している。

これらの土器を総括してみると、陶質土器は、ほぼ行基焼編年の各時期にわたつていることがわかる。すなわち、第一型式ないし第二型式への過渡期にあたるもの(挿図第十三の1)、第二型式ないし第三型式への過渡期にあたるもの(挿図第十三の 2、7、8、12、18)、第三型式ないしその終末期としての結芽木様式にあたるもの(挿図第十三の 3～5、9～11、13～16、19～20)などである。

これらは、知多半島古窯で平安時代から室町時代にかけて焼成されたものであるが、この貝塚では、第一～第二型式の製品に対して第三型式ないしは結芽木様式にかけてのものが多い。

胎土に粗砂の混入が多く、器の表面ににざらつきの多い知多古窯の製品に対して、胎土がち密で薄手な作りのツバ付土器、内耳土器などの土師質の土器や、天目茶碗、小形長頸壷は瀬戸地方の製品である。

神仏にそなえる祭祀具として作られたと思われる小形長頸壷は、その器形やうわぐすりの手法から(註1)、それが安土、桃山時代から江戸初期にかけて瀬戸地方で見られる同形の実用品を模して作つたものと考えられる。

この貝塚でみられる瀬戸地方の製品は、山茶碗と山皿各一例のほかいずれも室町末期から江戸初期にかけてのものである。このことは「室町時代中葉までは知多古窯の製品が圧倒的に多いのに対し、室町末期から以降は瀬戸地方の製品におきかえられていた」(註2)ことを示すものであり、半田市常福院貝塚での所見と軌を一にするものである。

註

1.瀬戸市史編纂委員　宮石宗弘氏の教示による。

2.立松宏「常福院貝塚」(『半田市誌資料第2巻』所収・昭和44年)

(磯部　幸男)

3. 石　器

柳が坪遺跡において出土した石器はもちろん弥生文化期の所産である。

もともと本遺跡は石器の量が少なく、昭和27年の第一次調査の時には、カンナ刃形片刃石斧と凹石の２個を採集しているにすぎない。今度の調査においては、石斧３個、石錘１個、凹石３個さらに砥石１個を加えることができた。第一次調査の時のものも加えて紹介してみよう。

(1)　石斧　カンナ刃形石斧（挿図第十四の５）は材質が緑泥片岩で、大きさはタテ3.5㎝、ヨコ3.2㎝というタテにわずかに長い矩形である。厚さは0.4㎝でよく磨かれた利器である。

今度の調査の石斧は、磨製が２個と打製が１個である。磨製の２個は班れい岩製と硬砂岩製でいずれもハマグリ刃形であり、前者（挿図第十四の４）は基部を欠いた二分の一程度で、後の１個（挿図第十四の３）は刃の部分と基部を欠いた約三分の一である。

そして打製の１個は、縦に長いもので、中世のものかも知れない。

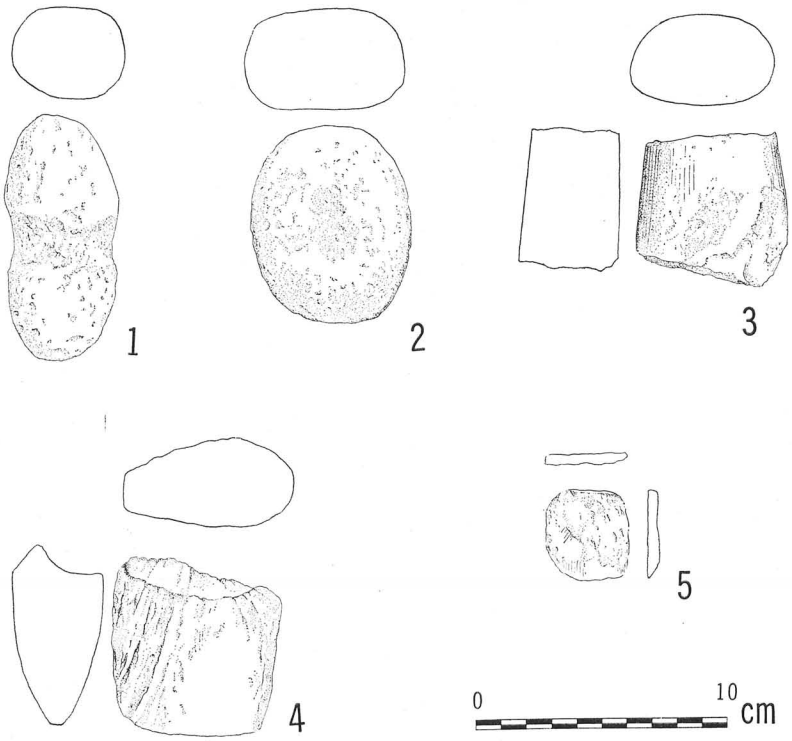
(2)　凹石　凹石のうち第一次調査の時の出土例（挿図第十四の２）は、砂岩製で長さ８㎝、巾が５㎝、厚さ4.5㎝大の丸石で、上下とも中央にそれぞれ１個ずつの凹みをもつている。

今度の調査の出土例の３点は、１個が硅岩で、上下ともに凹みを１つずつもつており、他の２個は砂岩である。砂岩の例の上下面にみられる凹みは浅くて広い。

(3)　石錘　凝灰岩製の１個（挿図第十四の１）で、長さ約10㎝、径４㎝程の太さであり、中央部が細くなつている。全体の器形が縄文時代の独鈷石を想像さす器形であるが、石材といい遺跡の年代や性格からいつても、弥生時代の石錘と考えるべきであろう。

(4)　砥石　砥石と考えた資料は残欠である。面に砥面らしいすり面をもつている。

（杉崎　章）



挿図第十四　柳が坪遺跡出土の石器

第六章　柳が坪遺跡出土の人骨について

保存状態はほゞ良好といえよう。手根骨・指骨・足根骨・趾骨の一部が欠如する。また、肩甲骨は左右とも破損がいちじるしい。

おもにこのような関係から、今回はとくに、もつとも時代的・地域的特徴を顕著に示す頭骨を中心に観察・記載を行うことにする。

観察および考察

当出土人骨は、その特徴から女性と推定して間違いない。また頭骨にみられる諸形質の年令的変化、たとえば縫合閉鎖の進行状態、歯牙の萌出状況や咬耗度、下肢骨や寛骨などの化骨程度から、大体20才ぐらいと推定される。全体として、古人骨ではきや奢なタイプに属するといえよう。

長管骨の計測値（大腿骨長：右393.5　左396.0，　脛骨長：右300.5　左301.0，　上腕骨長：右272.0　左270.0，　橈骨長：右206.0　左207.0）をピアソン式にて身長を推定すると147.0～148.0*cm*で、現代女性とくらべて、とくに大きな差はないようである。

本頭骨は、上面観において、楕円に近い卵円形を呈し、いちじるしい長頭型である（頭長幅示数：172.0）。これまで報告されている各時代の出土人骨で、かかる長頭型を含むものとしては、鎌倉時代群がそれに匹敵する（付表二）。頭最大長の 186.0 という値は、女性としては、上限に近いが、これは主として、後頭部の後方への膨隆がいちじるしいことによるといえよう。頭頂骨では、とくに頭頂結節の中程度の発達をみる。長頭型で、かつ後頭部のこのような膨隆の目立つのは、古墳以降とくに、鎌倉・室町時代群に多く、縄文・弥生時代群ではきわめて少ない。

側面観についてみるに、長高示数71.5で、正型 Orthokran に属する。眉間 Glabe lla および眼窩上の眉弓 Arcus super ciliaris の膨隆発達度はきわめて弱く、前頭部の彎曲は女性特有の丸味が強い。また縄文時代人に特徴的な、前頭骨の頬骨突起は、さほど強くない。すでに述べたように、後頭部では後方へいちじるしく膨隆して、ピラミツド状を呈する。ここに記載した諸特徴は、すべて古墳時代以降とくに中世時代群によくみられるもので、その意味で本頭骨は、一般の縄文時代群の型から、かなり大きく距つているといえよう。

歯槽側面角は、歯槽部突顎程度を示し、その値の小さいほど、俗にいう「反つ歯」の度が強い。従来の報告によれば、鎌倉・室町時代群は極端に小さい値を示し、縄文・古墳・現代の順に値は大きくなる（付表二）。本頭骨では、 60.0°の値を示し、かなりいちじるしい歯槽突顎で、鎌倉時代群に匹敵する。

後面観では、頭頂結節の発達をみるため、典型的な「家」型を示す。幅高示数99.3で Akrokran に属し、この点においても、縄文時代群（♂99.2～96.3　♀89.3～96.7）、古墳時代群（♂95.0　♀92.5）を大きく離れ、むしろ中世時代群に近い（♂99.8　♀97.6）。

つぎに正面観についてみよう。

コルマン顔示数では、頬骨弓幅に比し、顔高が大きいため、高顔 Leptoprosop に属し（92.3）、この値は、むしろ現代人に近い。

鼻部では鼻示数52.9で、縄文時代群（♀56.1）に比べると、いちじるしく小さく、むしろ古墳時代群以降の値に相当することがわかる（広鼻）。一般に縄文時代人では、鼻根部は深く陥入するのが普通であるが、本頭骨ではそれもみられず、扁平で幅が広い。これはとくに古墳～中世時代群の特徴とされているものである。

眼窩口は鈍円四角形で、眼窩示数80.0、縄文時代群（♀74.8～81.0）、古墳時代群（♂80.6　♀

付表二　柳が坪人骨の各計測項目の比較

（単位mm）

計測項目	柳が坪人骨♀	鎌倉♀	古墳♀	縄文♀（吉胡）
1 頭骨最大長	186	177.9	173.1	176.7
5 〃 底長	95	97.0	95.7	97.8
7 大後頭孔長	38	34.1		
8 頭骨最大幅	134	131.8	136.6	141.7
9 最小前頭幅	95	90.5		96.4
10 最大 〃	114	109.0		120.2
11 両耳幅	126	113.5		122.9
12 最大後頭幅	116	104.4		
13 基底幅	103	100.6		
17 バジオン・ブレグマ高	133	128.8	128.2	136.3
23 頭骨水平周	515	495.6	501.3	513.2
24 横弧長	287	297.2	296.9	309.8
25 正中矢状弧長	375	360.1	353.0	369.7
26 前頭 〃	118	121.4	120.6	124.5
27 頭頂 〃	137	124.4	124.0	128.0
28 後頭 〃	120	114.6	109.9	116.4
29 前頭弦長	105	106.6		
30 頭頂 〃	122	111.6		
31 後頭 〃	101	99.6		
8/1 頭骨長幅示数	72.0	74.2	79.1	80.1
17/1 〃 長高 〃	71.5	73.4	73.6	77.1
17/8 〃 幅高 〃	99.3	97.6	92.5	96.5
9/10 横前頭 〃	83.3	82.8	82.7	80.5
9/8 横前頭頭頂 〃	70.9	69.1	66.3	67.5
27/26 矢状前頭頭頂 〃	116.1	103.3		
28/26 〃 前頭後頭 〃	101.7	94.4		
28/27 〃 頭頂後頭 〃	87.6	92.0		
29/26 矢状前頭 〃	89.0	88.2	87.7	86.8
30/27 〃 頭頂 〃	89.1	89.6	89.8	88.0
31/28 〃 後頭 〃	84.2	84.3	87.8	85.6
40 顔長	96	94.9	96.6	95.0
42 下顔長	103	101.0		

計測項目	柳が坪人骨♀	鎌倉♀	古墳♀	縄文♀
43 上顔幅	107	100.1		104.7
44 両眼窩幅	101	94.7		98.5
45 頬骨弓幅	130	124.6	121.7	132.5
46 中顔幅	104	95.4	98.4	98.7
47 顔高	120	105.1	112.4	108.2
48 上顔高	68	61.6	65.1	60.9
50 前眼窩間幅	23	18.2	17.7	19.5
51 眼窩幅	40	40.7	41.5	41.8
52 眼窩高	32	32.9	33.6	32.3
54 鼻幅	27	24.7	25.4	25.5
55 鼻高	51	46.9	48.0	44.8
60 上顎歯槽長	52	49.5	50.4	50.7
61 上顎歯槽幅	67	60.7	61.6	63.4
47/45 顔面示数（コルマン）	92.3	84.5	88.7	82.7
48/45 上顔面 〃（ 〃 ）	52.3	48.9	55.0	47.7
47/46 顔面 〃（ウイルヒヨウ）	115.4	109.4	115.2	109.6
48/46 上顔面 〃（ 〃 ）	65.4	64.1	67.0	61.6
52/51 眼窩示数	80.0	79.9	81.5	74.8
54/55 鼻 〃	52.9	52.6	53.2	56.1
61/60 上顎歯槽 〃	128.9	124.1	120.0	127.4
65 関節突起幅	126	118.3	107.0	121.4
66 下顎角幅	104	89.8	94.7	97.9
69 頤高	32	28.7	31.4	29.9
70 下顎枝高	58	51.9	56.7	56.2
71 下顎枝幅	37	34.8	33.6	32.4
71/70 下顎枝示数	63.8	63.1	59.8	57.2
72 全側面角	79	81.1	82.5	80.0
73 鼻 〃	88	89.0	86.4	87.1
74 歯槽 〃	60	59.1	71.4	66.7

81.5)、中世時代群（♂78.2　♀79.9）、現代人（♀82.4～86.9）と比較するとき、中世群にもつとも近い値を示すことがわかる。

下顎骨についてみるに、上顎の歯槽部突顎がいちじるしいのと対応して、切歯下歯槽部（Pars subincisiva）の発達が中程度にみられ（江原Ⅲ型）、これは、縄文時代群にみられない特徴で、むしろ中世以降を特徴づけるものである。したがつて、歯の咬面は切歯部で高く、頬側歯を後方に進むにつれて下降する。縄文群に特徴的な鉗子状咬合がみられず、中世群以降に顕著にみられる鋏状咬合である点も注目に値しよう。

下顎下縁部は、カイターⅢ型（Schaukelform）に属し、古墳（75.0%）鎌倉（67.3%）両時代にもつとも頻度の高いものであるが、この型は縄文その他の時代群でも40%程度はみられるものである。

オトガイについては、カイターⅢ型に属し、発達は中程度で、縄文時代群には稀にみる型である。

下顎枝は幅の増大が目立ち、下顎枝示数では、縄文・古墳各時代群と大きく異なり、むしろ中世群に近似する。

次に歯牙についてみるに、上顎は欠如歯なく、下顎では右第2大臼歯が生前脱落した痕跡があり、全体として咬耗は下顎右第1大臼歯で、すこし進んでいる。第3大臼歯は萌出が完了しているが、咬耗はほとんどみられず、かかる点から第3大臼歯萌出直後ぐらいに死亡したものと推定される（18～20才）。下顎右第1大臼歯にはムシ歯の痕跡が認められ、下顎切歯部では、とくに歯石の沈着が認められる。

以上総合すると、本頭骨は、古墳末期ないし中世的特徴がかなりいちじるしく、縄文時代群としての特徴は、むしろ弱いといわねばならない。ただ西の宮貝塚第2号人骨にみられるように、長頭型（73.3）で後頭部膨隆のいちじるしい例もあり、はたして本頭骨のもつ形質が、地方的特徴なのか、時代的移行型として捉えるべきかは、同地方の同一時代人骨群と、さらに詳細に比較を試みることによりなされるべきであり、早急であつてはならない。本人骨の系統上の位置付けが一日も早く明らかにされることが望まれる所以である。

（江原昭善・渡辺毅一）

第七章　総　　括

東海市の南部で、かつて横須賀町といつていた地域から、知多市の八幡地区へつづく平地は、知多半島の沖積平野の中では屈指の面積をもつている。

しかし自然堤防の発達した阿久比川の谷とは性格がことなり、地形形成の点では砂堆列(さたいれつ)の上に砂丘こそのつていないが、野間の谷と比較的よく似ている。すなわち海岸線と平行して幾条もの砂堆列が走つている。これは沖積平地が浅海底であつたころに形成され、海水位の下降とともに陸上へ姿をあらわしたもので、谷の奥から第一・第二・第三の順序に砂堆列をかぞえるが、その年代差はあまりなかつたものとされている。

そして柳が坪遺跡の地形についてのべれば、谷頭部に鎌が谷池をもつ谷の出口にあたつており、それをせきとめるような形で柳が坪砂堆がつくられ、南は小さい川をまたいで知多市の野崎砂堆につづいている。そして約 300m もはなれて西側にこれも知多市であるが、獅子懸(ししかけ)砂堆が第二砂堆の形でならんでいる。

昭和28年の秋、名古屋大学文学部地理学教室に内地留学生として派遣されていた私は、指導をうけた井関弘太郎氏とともに実地の踏査をくりかえし、海岸線の後退を示す浜堤列であると、仮りに考えていたのであるが、翌年になり井関弘太郎氏は名古屋大学へ集中講義にこられた東京大学理学部の多田文男博士を案内され、平野地形の形成をテーマに検討を加えられた。その結果、マウンド列に堆積した砂の粒子が、風でとばされる以上の大きさをもつ砂粒がふくまれており、砂丘でないことはいうまでもないが、いわゆる浜堤といつて海岸汀線に打ちあげる波浪によつてきずかれた大小の礫をまじえておらず、部分部分が一応の選別を加えられた粒子の大きさで統一されていることから、平野が浅海底であつたころ、海の底で形成された沿岸州が、海水位の下降にともなう海退により、一挙に陸化され、地上へ姿をあらわしたものであつて、砂丘や浜堤と区別して砂堆とよぶべきであろうといわれた。つまり各砂堆の間に陸代の年代差はあまりみとめられないということである。

やがて谷頭部につくられる自然の湿地を利用した初期の農耕集落の発生にあたり、柳が坪砂堆の上にも、野崎そして獅子懸砂堆の上にも、砂堆の丘陵側で湿地に面した側を主として古代集落が根づきはじめられたものである。

柳が坪遺跡からは縄文土器が2片検出されているが、私たちはそのベースをみとめたわけではない。遺跡の南につづく野崎遺跡の調査においても、2個体の縄文資料をおなじような条件で採集（註1）しており、この点については柳が坪や野崎の砂堆の上で縄文時代の生活がいとなまれたものではなく、周辺の丘陵に存在していたものが、砂礫とともに侵蝕され、やがて沿岸州にうちあげられたという二次堆積によるものと理解している。

一方、弥生文化の時代においては、近隣の野崎・獅子懸そして柳が坪の三遺跡の間において、野崎遺跡が続水神平式土器（野崎第Ⅰ群）を主体として成立し、獅子懸遺跡もまた続水神平式土器にはじまり、野崎第Ⅱ群の時期にあたる瓜郷(うりごう)式や西志賀Ⅱb式（貝田町式）、さらに野崎第Ⅲ群としてわけた獅子懸式の時期につづいているのに対し、柳が坪遺跡においては続水神平式土器はまつたくみとめられない。柳が坪遺跡は、野崎・獅子懸・柳が坪の三遺跡の中ではもつともおくれて出発し、野崎第Ⅱ群として編年した西志賀Ⅱb式（貝田町式）や瓜郷式の段階からはじまつており、出土した弥生土器の量は次の野崎第Ⅲ群の土器がもつとも多い。

そして柳が坪遺跡の弥生土器の中で、最初の時期にあたる野崎第Ⅱ群土器は、野崎や獅子懸の遺

跡が、瓜郷式土器の地域型ともいえるほど、東三河地方で発達した瓜郷式土器に類似したものであるのに対し、柳が坪遺跡のそれは尾張地方の平野部で発達した西志賀Ⅱb式の影響を強くうけたもの（挿図第三の1～7）であつた。

このことは野崎第Ⅲ群の時期においてもいうことができる。この時期は尾張平野や名古屋台地の外土居式とか、西三河地方の古井式、東三河地方の下長山式などとともに、知多地方では獅子懸式が成立し、尾張・三河地域では小さい地方文化圏に土器型式が区分されるという様相（註2）を示した時期であるが、野崎遺跡や獅子懸遺跡においては獅子懸式土器が主体となつているのに対し、柳が坪遺跡では尾張平野の外土居式土器（註3）への傾斜が強い傾向がみられる。わずかに400mという湿地帯をはさんでならんでいる三つの遺跡の間にも、おなじような時期にそれぞれ主体的にみられる土器の型式がちがつている。三つの遺跡の間では、どのような交流があつたものであろうか。

さて柳が坪遺跡から出土するこれらの弥生土器は、野崎第Ⅱ群（西志賀Ⅱb式・瓜郷式）や野崎第Ⅲ群（外土居式・獅子懸式）のほかに、つづく長床式さらに寄道式といわれる諸段階があるのであるが、それぞれ独立した層序をなして存在しているのではなく、最下層の黒褐色有機土層の中に、弥生土器層として包含されているのである。いいかえれば野崎第Ⅱ群の時期にはじめて弥生人の住居の地となり、ひきつづき継続して居住がつづけられたものであるが、寄道式の時期において層序の攪乱がなされたものであろう。

そして、さらに新しい弥生文化の終末期においても、地点を異にしてところどころピット状の遺構があり、セットをなした弥生土器の一括資料が出土している。遺跡の由来の中でのべたように、この遺跡の名を冠して学界に紹介されている柳が坪型土器の一群（挿図第二・第四）なども、ここにいう出土資料の中の例である。

柳が坪遺跡には古墳時代から奈良時代・平安時代という約800年の間の資料がみられず、この間の時代の空白を物語つている。そして再び柳が坪遺跡の土地に集落がいとなまれるのは、鎌倉時代後葉以降であり、甕や壷の陶質土器（挿図第十三）がこれを示している。

これらのいわゆる中世資料は、従来の考古学の研究にあたつては軽くあつかわれていたのであるが、最近の十数年における歴史考古学とりわけ古窯製品の研究によつて、こまかい研究がなされてきたものである。中には平安時代末葉（挿図第十三の1）とか鎌倉時代中葉（挿図第十三の2）といつた甕の型式を示すものもあるが、それらの時期に対応される山茶器や鉢の資料がみられず、一定の時期の存在が一括資料の裏付をもつて確認されるのは、鎌倉時代後葉から室町時代につづく時期であろう。そして挿図第十三の21～23に示した中世の内耳土器やツバ付土器も生活土器として同時代のものである。

上層の貝層あるいは混土貝層からは、これらの中世資料のほかに近世初頭の出土品も発見されている。挿図第十三の24に示した小壷はその1例であるが、強いて年代をあげれば慶長時代のころに比定されるものである。この資料は器高5cm程度の祭祀品であるが、古瀬戸釉を全面に施されており、おなじ器形の大形の品がこの時期に瀬戸地方で一般的にみられることから年代を比定されている。（註4）

このような過程をえて柳が坪遺跡は近世の歴史の中へ到来しており、遺跡の北方には高横須賀村の部落氏神をもつた森が位置していたものである。

最後にほとんど完全に出土した人骨についてふれたい。発掘を担当した宮川・大下の両調査員がのべているように、試掘の時にトレンチの北壁にそつて出土し、本調査にあたつては、この出土地点をもととして、第三地点を設定したものであり、出土層序は基盤に掘りこんだ小判形ピットの底から検出され、ピットの中には黒色有機層が充満した形で埋葬がみられたものである。

試掘の当時は、この人骨を弥生人骨として期待をもつていた。それには理由もある。

試掘坑南壁の西端でピツト状におちこんでいた黒色有機層が、斜めにのびて北壁につづいており、人骨出土地点もこのくぼみに入つていたということである。もう一つは試掘地点付近の黒色有機層には中世資料がほとんどみられず、最下層の黒褐色有機層とともに黒色有機層も、弥生式の包含層ではないかと当初から想定していたことに思いちがいがあつた。しかし調査を進めていくと、すでにのべたように、貝層ならびに混貝砂層は終末を近世初頭にとらえた層であり、黒色有機層は中世の中葉か後葉の層であつた。

そして最下層の黒褐色有機層のみが弥生式の包含層であることを識別して、この人骨が中世人骨であることをも想定しながら、解剖学的な検査の結果をまつていたのである。その結果は京都大学霊長類研究所の江原昭善・渡辺毅両先生によつて、すでに第五章にのべておられるように測定による総合的な見解は次のようなものであつた。すなわち、「古墳時代末期ないし中世的な特徴が、かなりいちじるしい。大体にして20歳ぐらいの女性と推定される。」しかし、柳が坪遺跡には古墳時代には集落がいとなまれておらず、中世であつても前葉の資料は空白であつた。結論としては鎌倉時代後葉から室町時代前葉の時期のもので、20歳前後の女性人骨ということであつた。

人骨の解剖学的な検査の過程で、弥生時代群ではなく、古墳時代人とか中世時代人に近い要素が濃厚であるというので、考察にあたり遺跡の出土層位の検討をもとめられたことなど、厚く感謝いたしたい。

註

1. 杉崎章『八幡のむらのおいたち』（八幡町史資料第2集・1956年）
2. 久永春男「尾張・三河・遠江における弥生式土器の諸型式とその地域圏」（日本考古学協会第16回総会研究発表要旨・1955年）
3. 田中稔編『高蔵貝塚』（豊橋市瓜郷遺跡調査会・1954年）
4. 瀬戸市史編纂委員宮石宗弘氏の教示による。

（杉　崎　　章）

付載第一　東海市高御前遺跡

1. 位置・地形

東海市大田町の高御前（たかのごぜん）遺跡で人びとが生活していた時期は、漁撈や狩猟などの採集生活をつづけていた縄文時代のころである。

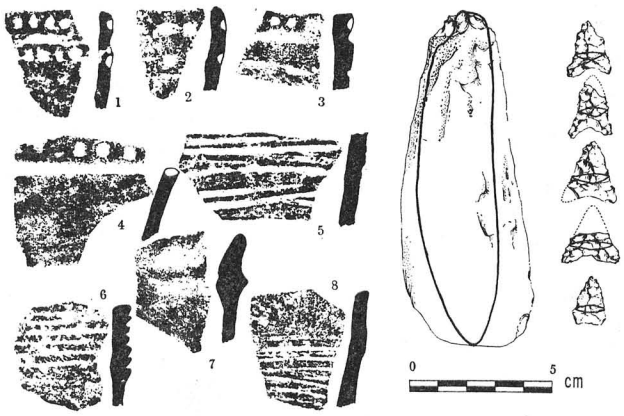
そして高御前遺跡の存在が学界へ報告されたのはすでに久しい。明治時代の末葉のことであろうか、下村武一郎氏という研究者が知多半島の先史遺跡を調査されて、遺跡の地名を人類学雑誌に報告されている。すなわち東海市の地域では、大田町高御前から貝塚が知られて土器や石器がでていること、また大里と記された他の貝塚がみられる。さらに加木屋町向山では石鏃の散布地が所載されている。

大田町の大里といわれた貝塚は、おそらく本書に併せて報告する機会をえた松崎貝塚をさしているものと推定され、年代も6世紀からはじまり8世紀までつづく古墳時代の遺跡である。そして高御前遺跡と向山石鏃散布地が縄文時代のものであり、両者の中で向山石鏃散布地については、現在のところ具体的な地点が知られていない。

高御前遺跡の位置（挿図第一）は、東海市大田町の高御前といつて、大田町の中でも木田とよばれる丘陵地帯である。名鉄電車の太田川駅で下車して東をみると、富木島町の方へむけて深く入りこんだ谷の南側をさえぎる高さ30m程度の低い丘陵がつづいている。現在はこの丘陵の手前北側に高等学校の建築がすすめられているが、この方向の丘陵の上に、きわだつて目だつように数本の老愛知県立東海商業松がのぞまれる地点がある。木田の部落の方からいけば、東北の方に谷をへだてた富木島町へくだる道路の西側にあたつている。今その老松のしげる地点には小さい神社がまつられており、遺跡はその東に接した畑地である。

2. 遺跡の由来

高御前遺跡は明治年間における発見であつたものの、今なお地点の不明な向山石鏃散布地とともに、間もなくその地点を失念され、数十年の間にわたり久しくわすれられていた。昭和28年の秋、私が横須賀中学校に奉職していたころの郷土クラブが、名古屋大学地理学教室の井関弘太郎先生に指導をうけ、大田の谷から加木屋と富木島の間の低地へ、ハンドオーガーによる試錐をすすめ、黒泥土の検出される地点の周辺に、初期の農耕集落の生産地すなわち弥生遺跡の立地をもとめていたころである。ちようど雨の降つた直後に高御前の付近をフイールドしていると、道の上に条痕文様のある深鉢形土器の破片（挿図第十五の5）が、雨で洗いだされていた。さらに注意して採集をすすめると、道路の西側の柿畑との境界で30点あまりの土器片がひろわれた。この地点が高御前遺跡の第一地点である。



挿図第十五　高御前遺跡第一次調査の出土品

翌29年の秋の麦まき前に調査してみる

と、うすい表土の下に黒褐色有機土層が、基盤の粘土層との間にはさまれていた。この中に土器がふくまれている。出土資料は挿図第十五にあげた6～8など、縄文文化晩期の中でも、すでに条痕文様が支配的な施文となつてきた終末期のものである。

ところが、そのご横須賀町史編纂委員会の事業として、各部落を巡回して談話会をもよおしている時、半磨製の石斧や打製石鏃（挿図第十五の右）が提供され、これも高御前遺跡のものであつた。

遺跡の地点が明らかとなつたので、さらに周辺を踏査したところ、第一地点の西方30mのところで神社に近い付近から、口縁部に指突文や押引文をもつ数点の資料を採集した。これが挿図第十五の1～4である。この地点を第二地点ということにしたが、縄文晩期後葉の中で元刈谷式といつているものであり、尾張から西三河地方で本刈谷神社貝塚を標式としている。この間の経緯については、横須賀町史別冊として昭和31年に刊行した『横須賀の遺跡』に報告したところであるが、条痕文様を主体とした第一地点とは、数百年も時代を先行するものと考えられている。

3. 高御前遺跡第二地点

昭和41年の冬、名古屋市大高町に住む山口青年から紅村弘氏を通じて、高御前において縄文貝塚を発見したという報告をうけた。案内をうけて10年ぶりに現地へ赴いてみると、高御前遺跡付近も次第に住宅地として土地造成されており、私が知つているかつての地形とは相当にへだたりのあるものであつた。

遺跡は、私がかつて高御前遺跡第二地点と仮称していた付近である。地主が住宅をたてるために表土をめくつたところ、遺物をふくんだ混土貝層が露出したものである。遺物包含層は約50cmの比高をもつて、畑が上下の両段に区切られた部分が中心と考えられる。早速、横須賀中学校教諭で町の文化財保護委員をしている石川玉紀氏に連絡し、緊急調査を要請した。石川氏は職場の山下義一氏や加古篤生氏の協力のもとに地主の了承をうけ、町当局の事業として昭和42年の新春、発掘調査にかかつた。

4. 第二地点の遺物

高御前遺跡第二地点は混土貝層をなしており、自然遺物としてあげられた貝はハイガイとハマグリ・アサリである。一方、人工遺物をあげると縄文土器片ならびに3個の石器であつた。縄文土器片は全部で45点であり、文様の有無と部位の区別は次の表のとおりである。

付表三

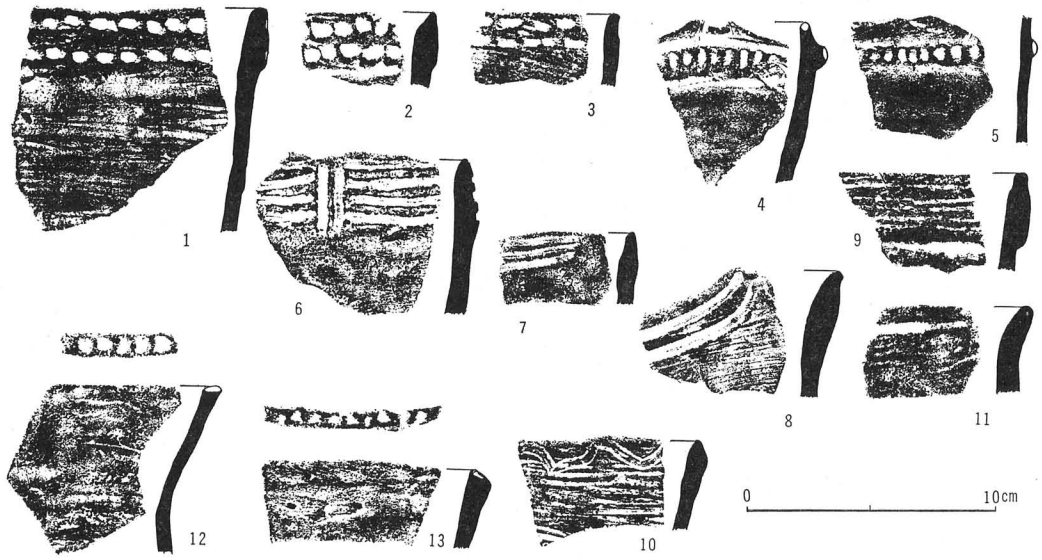
高御前遺跡第二地点の出土土器分類

	口縁部	胴　部	底　部	計
有　文	11	0	0	11
条　痕	2	4	0	6
無　文	12	8	8	28
計	25	12	8	45

上下二段の畑に区切られた遺物包含層の中で、下段の方は地ならし作業のためけずられて全く破壊されていた。比高50cmの段をなした畦道から上はまだ大丈夫との期待をもつてトレンチを入れてみたが、遺物の包含層が急傾斜したピットであるため、わずかのひろがりでおわつていた。つまるところ調査のできた範囲は幅40cmほどの畦道の下に、レンズ形に遺存していた混土貝層を中心としたものであつた。

口縁部資料の中の約半数にあたる11点に文様が施されており、施文具とその方法により4類にわけることができる。

(1)　口縁部の肥厚部に棒状器具を断続させた短線列を2条めぐらしたもので、3点のうち1点には肥厚部がみられない。おなじ棒状施文具をつかつているが、口縁部にそつて波線をめぐらしたものもある。（挿図第十六の1～3）



挿図第十六　高御前遺跡第二地点の出土土器

(2)　口縁部に半截竹管を施文具として、押引文様を施したものが５点あり、３条の線をめぐらし数か所にわたり縦位に２本の押引線をひいた例や、かるいタッチで波状押引文を施した例もみられる。文様帯に肥厚部をもつものともたないものは相なかばしている。（挿図第十六の６～10）

(3)　口縁部に近く紐状の突帯文を一条めぐらした例が２点あり、両者とも篦か棒による圧痕でかざられている。

(4)　文様はないが、口縁端にのみ圧痕列のみられるものが２点ある。（挿図第十六の12・13）

そして有文・無文をふくめた25点の口縁部資料の中に２例のみであるが、波状口縁の器形をしているものがあり、頂頭部が圧痕でかざられている。（挿図第十六の４・８）

石器の３点は、石鏃１と石錘１さらに凹石１である。

石鏃は無茎の打製であり、硬砂岩製の正三角形に近い形をしている。（挿図第十七の１）

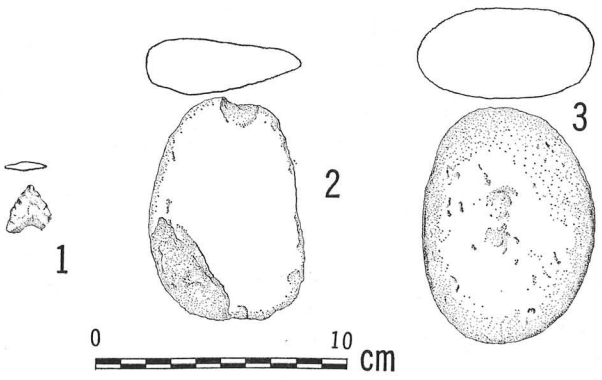
石錘は砂岩礫の両端を打ちかいたものである。（挿図第十七の２）

凹石は、花崗岩礫の中央をくぼまして使用したものである。（挿図第十七の３）

5. 結　　語

高御前遺跡は第一地点ならびに第二地点ともに、規模の小さいピット状の遺跡である。しかし東海市の市域の中では、縄文文化に属する唯一のまとまった遺跡である。

第二地点の時期は、縄文晩期後葉の元刈谷式に比定され、知多半島では知多市の西屋敷貝塚下層ならびに大草南貝塚、さらに半田市西の宮貝塚、東浦町の宮西貝塚や石浜貝塚とおなじ時期に属するものである。



挿図第十七　高御前第二地点の出土石器

そして第一地点の時期はさらにくだり、条痕文様が支配的な施文となつた縄文晩期の終末である。

両地点をくらべて、重要な相違の一つは第二地点が貝層をもつているのに対し、第一地点は貝のない包含層であつたということである。

高御前遺跡の東方、数百mのところにあたつているが、富木島町の姫島と加木屋町の本郷の台地の間にひろがる低地は、地学の上で名和——加木屋ラインといわれる地質構造線にあたつており、断層谷の上に自然の侵蝕の条件が加わつて、荒尾谷と加木屋谷の双方へひろがる低地は、この地方で陸化のもつともおくれた地域であろう。姫島とか舟島とよばれる地名が今ものこされているので、歴史時代になつても海が入つていたではないかといわれるところである。しかし、この点については陸化の足がおそいといつても、縄文晩期のころ、絶対年代にして今から2,500年から2,000年前のころを、この地域における海岸線後退の時と考えるのが妥当であろう。

半田街道から東へ200mも入つた低地の中央部で試錐してみると、表土の下に黒光りする黒泥土層が検出されてくる。さらにその下は海成砂層である。

東海地方における海進期の絶頂は、約4,500年前と考えられ縄文中期のころといわれ、この時代は濃尾平野でも養老山脈の付近まで海進がみられる。このころ海底に堆積した層が、この試錐地点でみられる海成砂層であつて、自然の貝もふくまれているものである。姫島・舟島・向山・本郷など台地の裾に海波が打ちよせていたものであろう。

ところが黒光りのする黒泥土層は淡水でなければできない地層である。海退期にあたり、海水位が2～3mも下降すると、現在の大田町の部落が形成されている砂堆が陸上にあがり、集落の定着も可能となる。この砂堆はもともと浅海底でつくられた沿岸州であるが、この砂堆の隆起によつて出口をふさがれた荒尾谷や加木屋谷の水は、試錐地点付近を中心として自然の沼地をつくつていたものであろう。沼地に成長し、やがて枯れていつた植物が水底に堆積したものが、ここに検出される黒光りした黒泥土層である。

貝層をもつ高御前第二地点の時期、貝のない包含層となつている第一地点の時期を、試錐地点のボーリング資料にみられる層序の変化に照合させて考えたものである。遺跡をとりまく微地形の変化は、生活環境の変遷となり、やがて、この沼地の周辺にも初期の農耕文化がはじめられ、弥生文化の集落が成立していくのである。

（杉　崎　　章）

付載第二　東海市松崎貝塚

1. 松崎貝塚と東海市の製塩遺跡

東海市の旧海岸線で、新日本製鉄の会社へ通ずる西知多産業道路の大田川インターの付根であるが、名鉄電車の線路にそつて、貝塚が点々とブロツクをなして連続している。明治時代の末年、知多半島に名鉄電車が開通する時、遺跡のある海岸砂堆の西縁がけずられ、貝塚が露出したものである。

松崎貝塚は、古代の製塩遺跡であり、知多半島において約30地点、渥美半島でも数地点が知られている。知多半島では、ほとんどその全域の海岸線から発見されているのであるが、東海市の大田町から高横須賀・横須賀・養父の各町の西海岸につづく一連の遺跡は、それらの中で代表的なものである。海岸の遺跡は有史以来、連続して生産地となり、またその上に漁村の部落がつくられたりしていて、せまい土地が何回も掘りかえされているので、遺跡の保存状態がよくないのが普通であるが、松崎貝塚の地点はその後も無人の砂堆になつていて、知多半島にのこされている製塩遺跡としては、もつとも遺存の良好な一つである。

東海市の地域で知られる古代製塩遺跡は、松崎貝塚を北限として、南へ下浜田（大田）、御亭（高横須賀）、宮西（横須賀）、大門（横須賀）、漁脇（養父）、浜脇（養父）、釈迦御堂（養父）と連続しており、なお遺跡は知多市八幡の荒井、西平井遺跡へつながり、先年の平城宮址発掘で調塩付札の土地として報告された朝倉里にいたるまでつづいている。

2. 古代製塩遺跡の構造

古い製塩技術を物語る言葉として、古くから万葉集などに「藻塩（もしお）やく」という語句があるが、この製塩工程を具体的にいうと、海水を濃縮させていく作業と、できた塩水を煮沸させていく仕事の両段階を、同時に合わせて表現したものである。海藻の利用は前段階の濃縮工程であつて、刈りとつた海藻を乾燥させ、塩の結晶が十分に付着すると、また海水をかけて、塩土の高い水をつくり、これをくりかえして濃度を高める作業である。そして製塩工程の後段階は煎熬（せんごう）作業であり、濃縮された塩水を小形の土器に入れて煮沸するのである。

このようにして製塩工程を濃縮と煎熬の両段階にわけることは、今も昔もかわつていない。海藻をつかつた濃縮工程は、塩田となり、揚浜式から入浜式へすすみ、塩水を煮沸する煎熬工程は、小形土器の利用から鉄釜とか石釜の使用に改良されているが、考え方としては、現在の近代的経営における流下式製塩であつても、枝条架（しじょうか）と流下盤を組み合わせていて、原則的にはおなじ工程を合理化したにすぎない。

しかし海岸に近く、他の遺跡とちがつた姿で知られる遺跡群が、製塩遺跡ということが明らかになつたのは、昭和30年ごろのことである。このころようやく全国的にすすめられてきた古代製塩の研究により、古墳時代から奈良時代へつづく土器製塩の遺跡であることがはつきりしてきたものである。全国では瀬戸内地方をはじめ、若狭・和泉・紀伊・淡路・尾張・三河・能登・佐渡・陸奥・肥後などから、おなじような条件で遺跡が発見されてきた。

遺跡の保存の良好な地点を観察すると、古い時代の海岸線にそつて、製塩炉址の存在を示す焼土面ならびに塩とニガリでかたくしまつたタタキ面があり、約10mも離れた後背地には、炉址での煎熬作業で破損した製塩土器が、炭や灰さらに炉の構造物とともに積みあげられており、時にはマウンドをなして遺存している例もある。

昭和44年12月から昭和45年の１月にわたつた松崎貝塚の調査においては、炉址の床面と推測される部分を検出した。灰や炭をまじえた砂層の下部に粘土をはつた幅40㎝ほどの面をみとめ、奥の方をおつてみたが長さ60㎝ほどで切れており、その延長は破壊され炉床面をもとめることができなかつた。

喜兵衛島調査団による瀬戸内海の島々や、石部正志氏等による若狭国の遺跡においては、炉床面の全体に平たい石がならべてあることが報告されている。それに対し東海地方の製塩遺跡では、炉をきずくのに石を用いていない。適当な石材の産出がないこととともに、この地方の製塩土器の器形が砂地へさしこんで器体を安定さしていることにも原因があるようである。こうした炉床面に粘土をはつている例としては、渥美半島の青山貝塚第三炉址があり、幅1.5ｍ・長さ２ｍほどの炉址の煙出しと考える部分にみられ、手前の焚口にあたる部分は塩とニガリでかたくしまつていた。ともあれ砂堆の上にきずいた炉址で、しかも石材をもちいていない場合、炉址の構造を検討することは困難が多い。

3. 製塩土器の様式と編年

東海地方における製塩土器は、特殊な脚台をもつた土器であるが、知多半島と渥美半島との間では、古い段階での様式に相違がみられて、知多式と渥美式にわけられている。

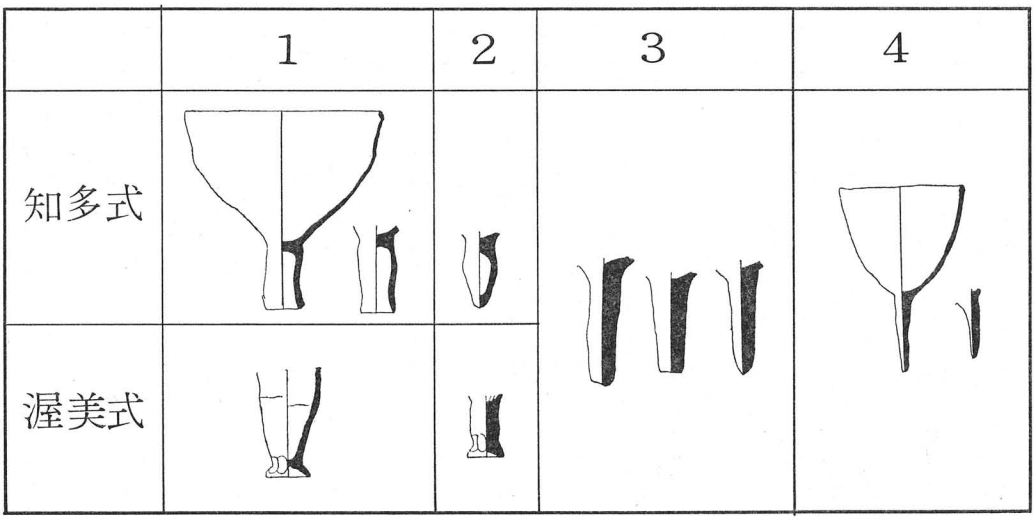
そして、いわゆる製塩土器の器形は次のようである。（挿図第十八）

第１様式　袋をさかさまにしたような筒形の脚台をもつた土器で、坏部は径20㎝前後の鉢形を呈する。

第２様式　第１様式と全体の大きさや作りがおなじであるが、脚台の先をとじて棒状となつている。脚の芯が中空であるのが特徴である。

第３様式　棒状をなした粗製の角形（つのがた）脚台をもつた土器で、外見は第２様式とおなじであるが、脚台の内部が充実している。

第４様式　小形の角形脚台をもつた土器で、鉢形をなした坏部の口径は10㎝をややこえる程度で



挿図第十八　東海地方製塩土器の変遷　（実測図は縮尺４分の１大）
第１・２様式（知多式いずれも松崎貝塚、渥美式いずれも青山貝塚）、第３様式（中央・大森遺跡、左右・下浜田遺跡）、第４様式（いずれも大森遺跡）

ある。

第1様式から第4様式にいたる製塩土器の変遷を、その形態的特徴からうかがつてみると、筒形をした第1様式の脚台部を砂質の炉床面にさしやすく、裾をとじて棒状にしたのが第2様式であり、第3様式は最初から棒状を意識したものである。そして第4様式は、いまだ鈍重の感がのこる第3様式の土器を、安定と量産という角度から改良した最後の様式であろう。

一方、渥美式製塩土器についてのべると、第3・第4様式では知多式製塩土器とその変遷をおなじくするのであるが、第1・第2様式という古式の段階はやや異つている。古式のそれは渥美町の青山貝塚と貝の浜貝塚の両遺跡のみであるが、坏部はコツプ状で脚台は小形の坏をさかさまにした形である。

知多式と渥美式の年代関係など、将来にのこされている領域もあるが、第1・第2様式は6世紀にはじまり、第3様式は7世紀に比定され、第4様式の時期は8世紀・奈良時代のものと考えられている。

松崎貝塚の第一次調査においては、第一様式の筒形脚台付土器を主体とする下層と、第4様式の角形脚台付土器を上層とする明瞭な知多式製塩土器の層序を発見し、下層では第1様式の資料 114点に伴出して、第2様式10点と第3様式3点の土器が検出された。ある時期においては三つの様式の併用ということが実証されたのである。

4. 後　記

松崎貝塚は、塩の生産を主とした遺跡であるが、貝塚を形成しているということは生活址でもあり、製塩土器とともに須恵器の伴出が多いなど、研究のために好条件をそなえていた。

ところで知多半島の古代製塩が一躍にして全国に有名となつたのは、平城宮址の発掘からであり、昭和38年の第13次調査にあたり、多数の木簡資料のでた中で、知多半島のものが三点ふくまれていた。南からいうと富具(ふぐ)郷野間里と贄代(にえしろ)郷朝倉里であり、番賀(はが)郷花井里である。野間は美浜町野間であり、現在の奥田付近に大規模な製塩遺跡が知られる。そして朝倉は知多市新知の朝倉であり、現在の汀線は岩盤の露出が多く砂浜が少いが、侵蝕による地形の変化であろう。

番賀郷花井里については、いろいろと論じられてはいるものの、具体的にどこの土地といつて比定する定説はみあたらない。従来は久しく、番賀郷の郷名と日長という知多市の中の地名が、発音の類似という点から、日長の土地が番賀郷の中心であると誤つて考えられていた。ところが地名の明らかな贄代郷朝倉里という木簡資料により、少くとも朝倉の土地までは贄代郷ということが確実となつてきた。番賀郷はそれより北であり、知多市八幡から東海市の地域がそれにあてられる。さらに塩を調として納めていることからみると、海岸線であり、松崎貝塚が知多半島における製塩遺跡の北限であるという理由から、松崎貝塚以南の海岸線に、その土地をもとめざるをえない。番賀郷花井里という古い部落を、松崎貝塚の土地であるとの指摘を強いるものではないが、その有力な候補であることをのべておきたい。

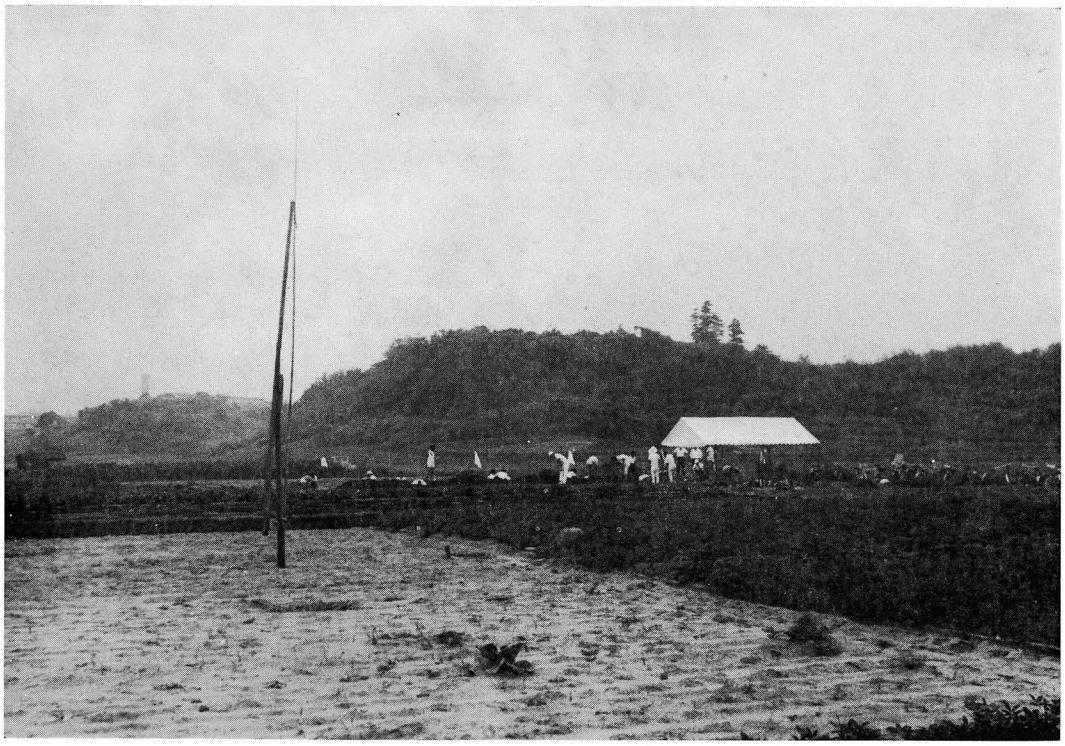
なお、その後の平城宮址発掘の木簡資料の中に、番賀郷×宅里という地名も報告されている。これもこの地域の中にもとめたい古地名である。

〔追　記〕

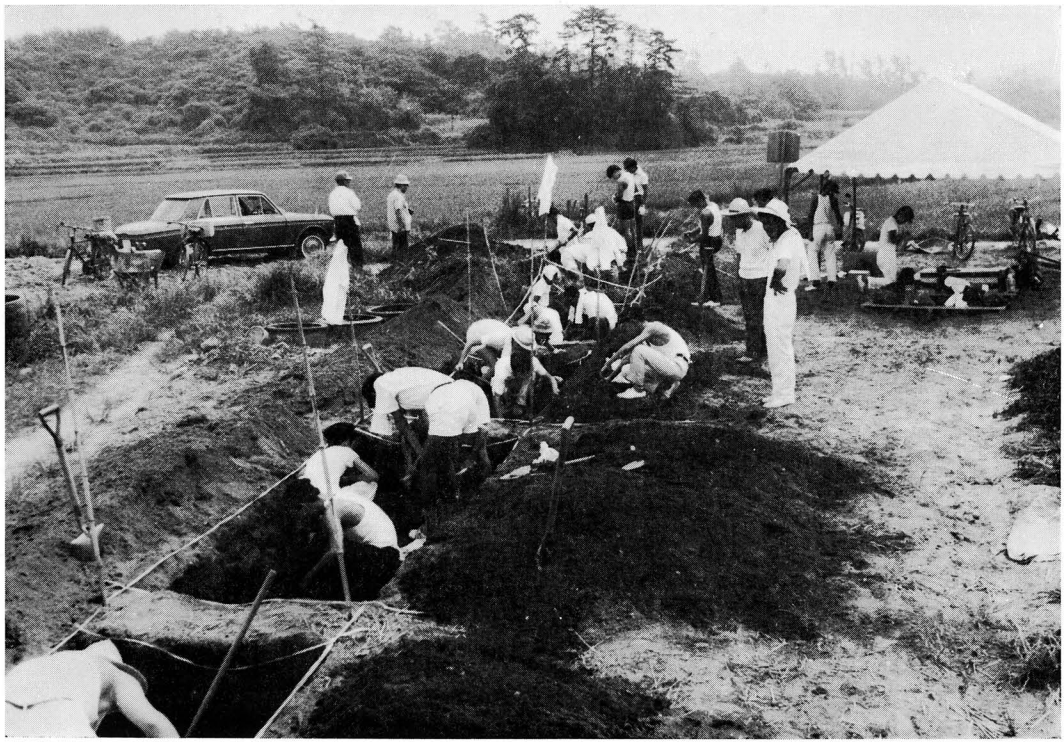
松崎遺跡については、これまで堀切貝塚とよんで報告（たとえば古代学研究20所収の「知多半島における古代海浜集落の土器」1956年など）をしてきたのであるが、堀切という字名は遺跡の北につづく水田地帯の中にあり、誤認であることを知つたので、本稿より松崎貝塚と訂正することにした。

（杉　崎　章）

図版第一

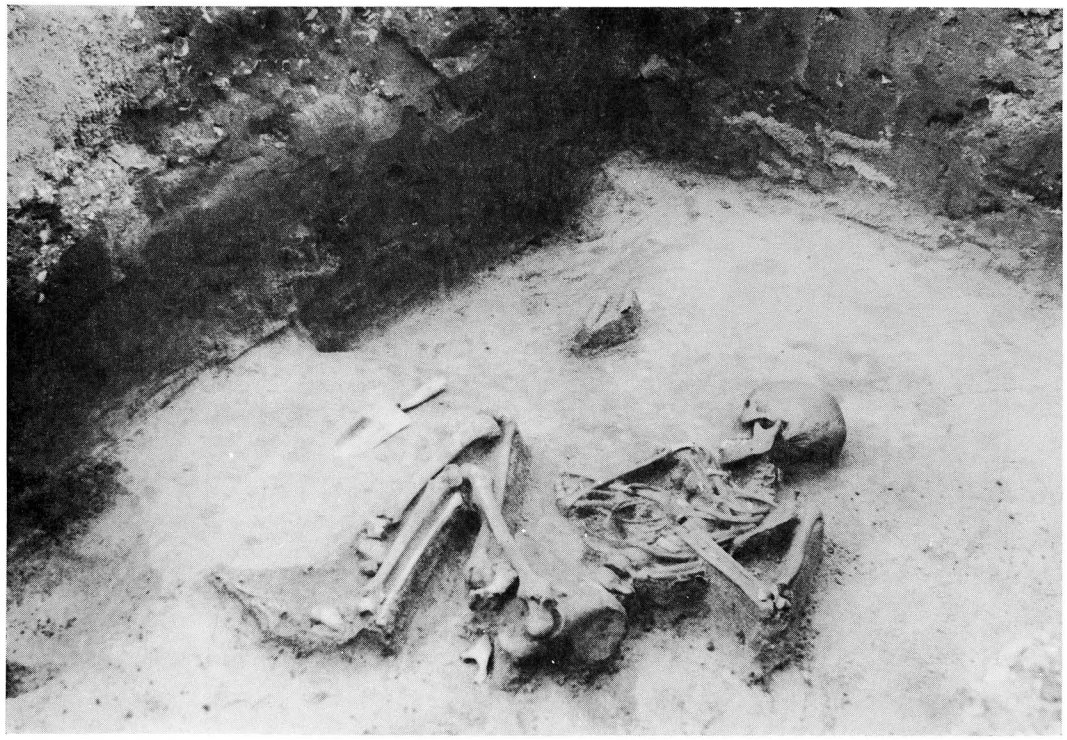


1. 柳が坪遺跡の調査全景

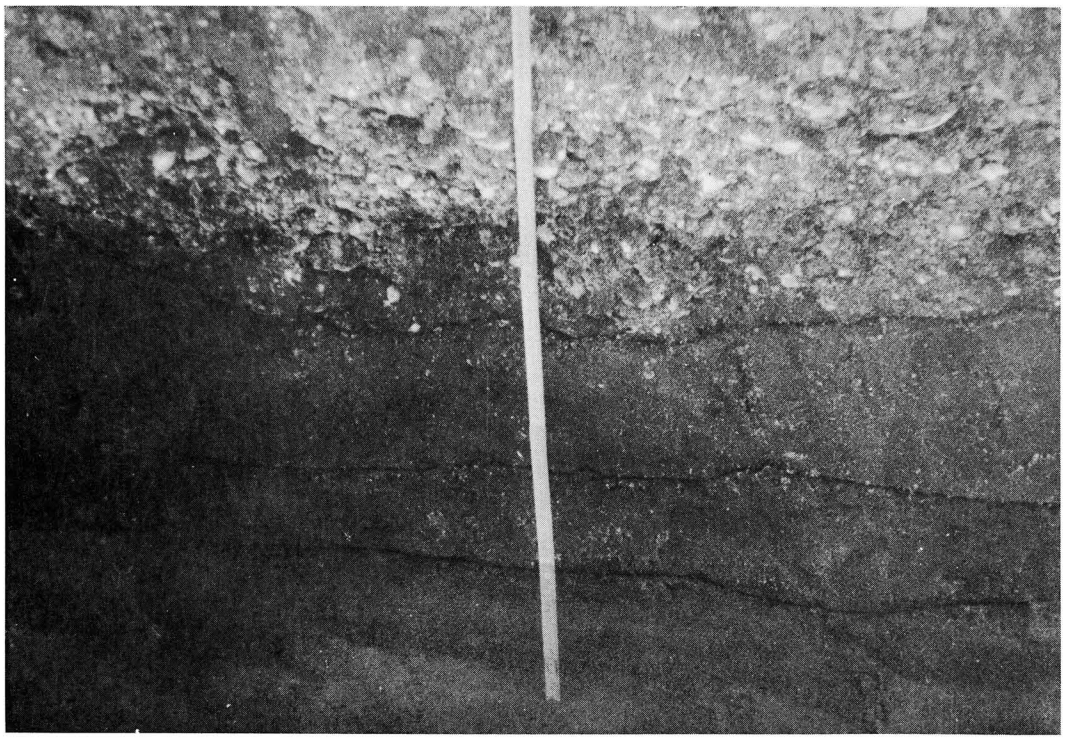


2. 柳が坪遺跡の調査状況

図版第二

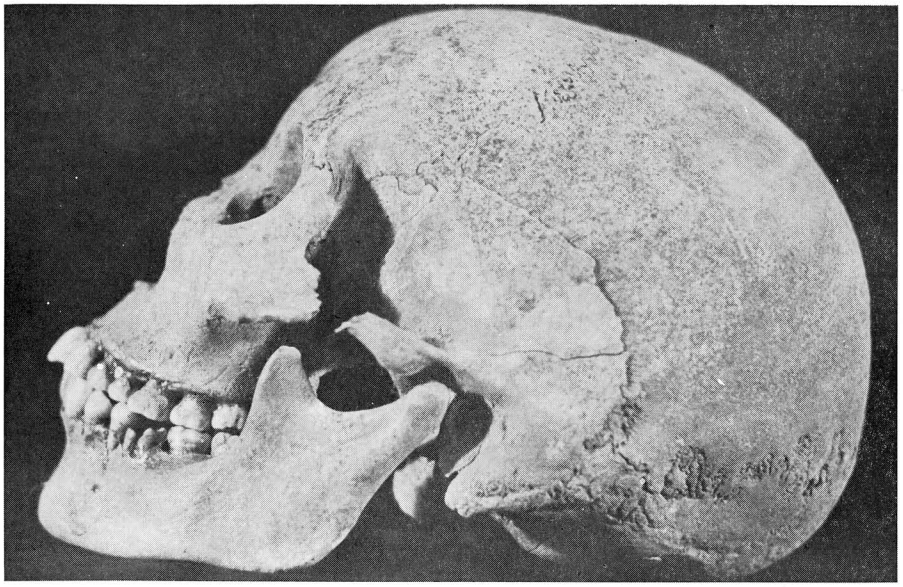


1. 柳が坪遺跡の人骨出土状況

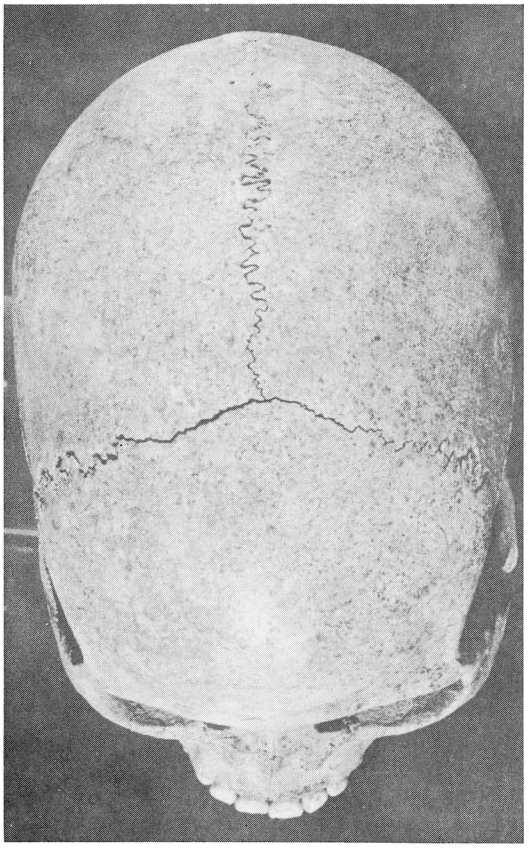


2. 柳が坪遺跡のトレンチ層序

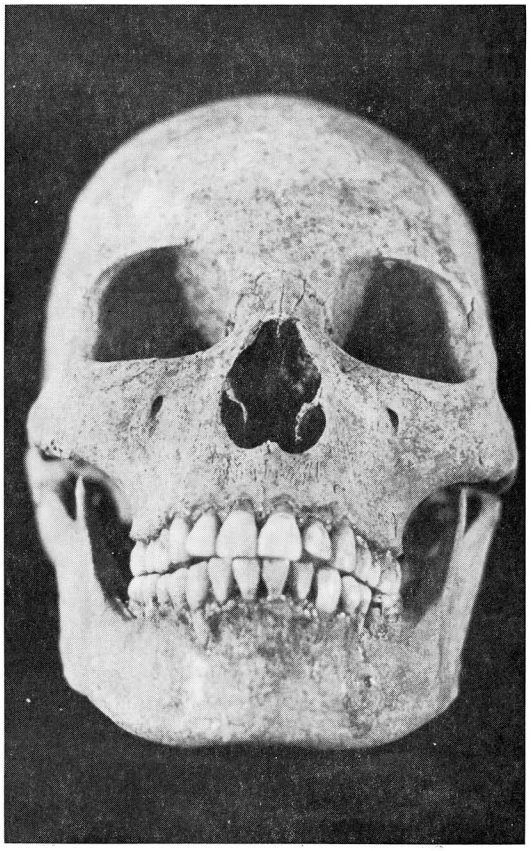
図版第三



1. 柳が坪遺跡の人骨頭部側面観

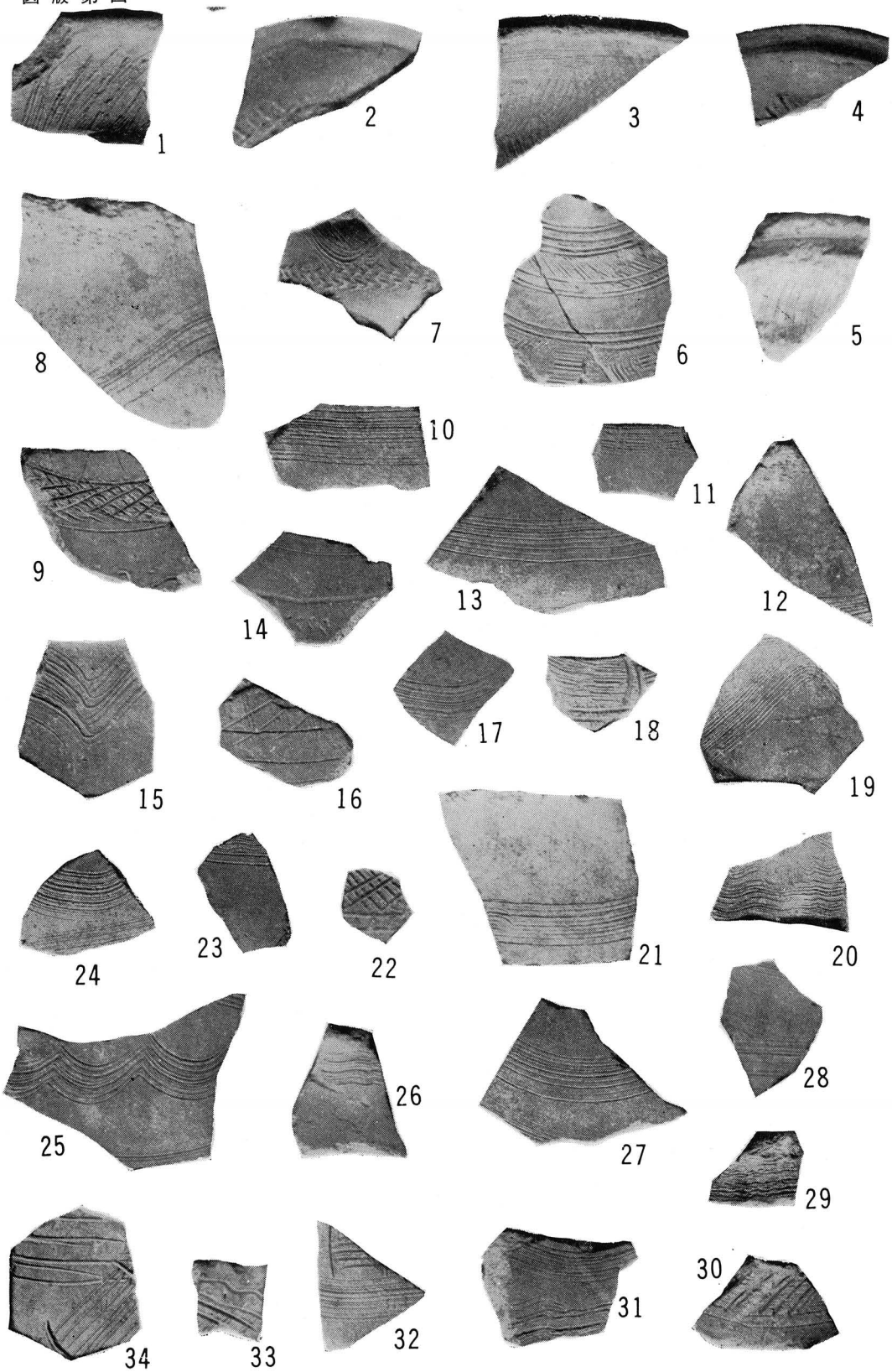


2. 仝、上面観



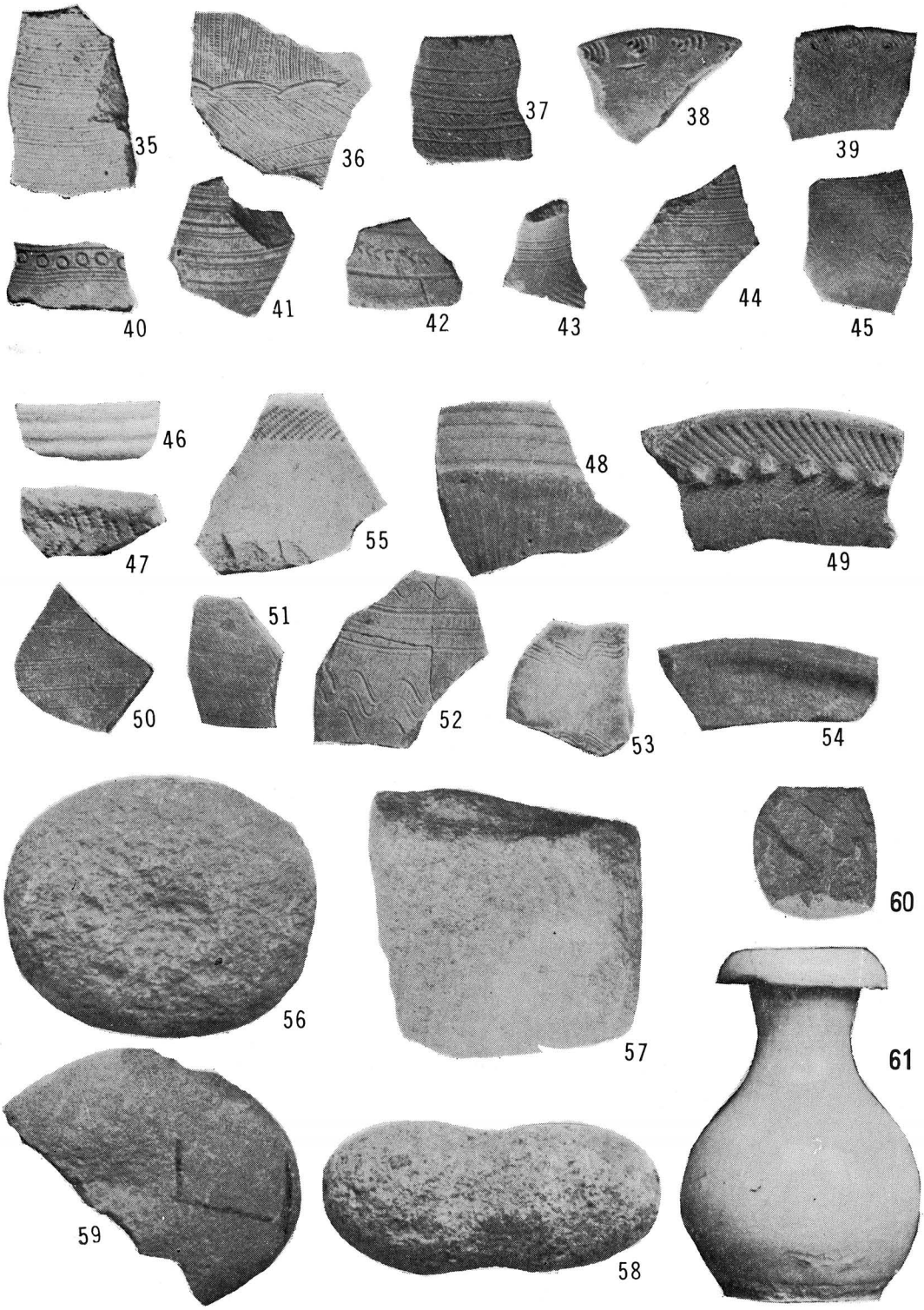
3. 仝、正面観

図版第四



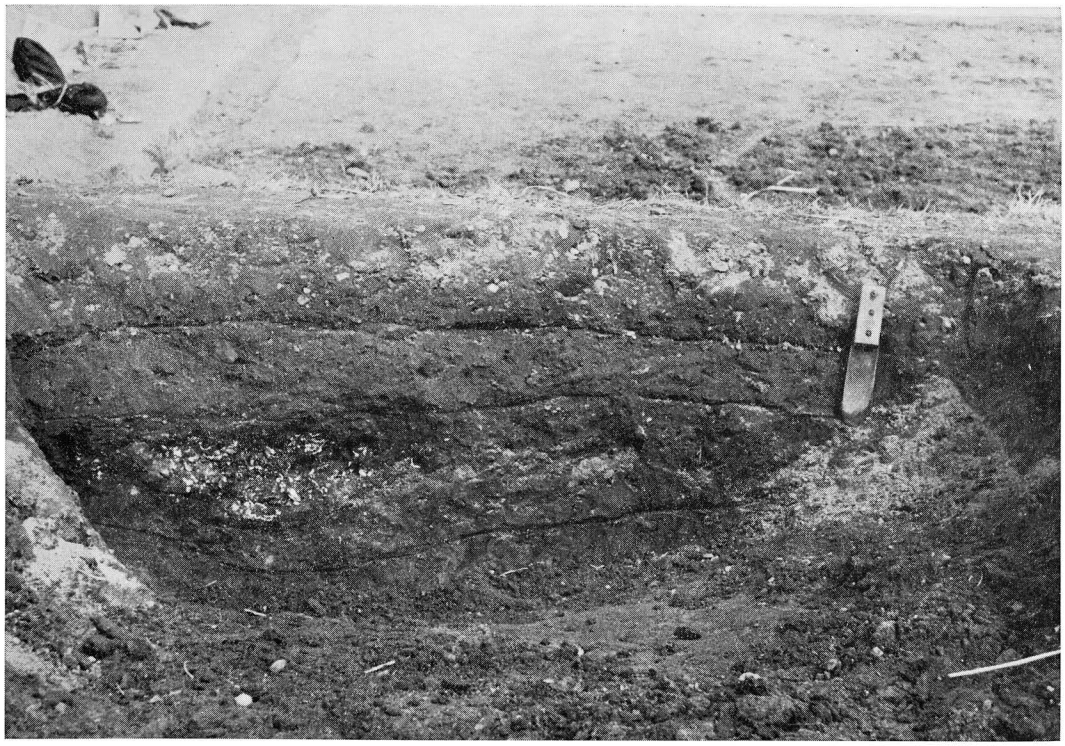
柳が坪遺跡の出土品 (1)

図版第五



柳が坪遺跡の出土品　(2)

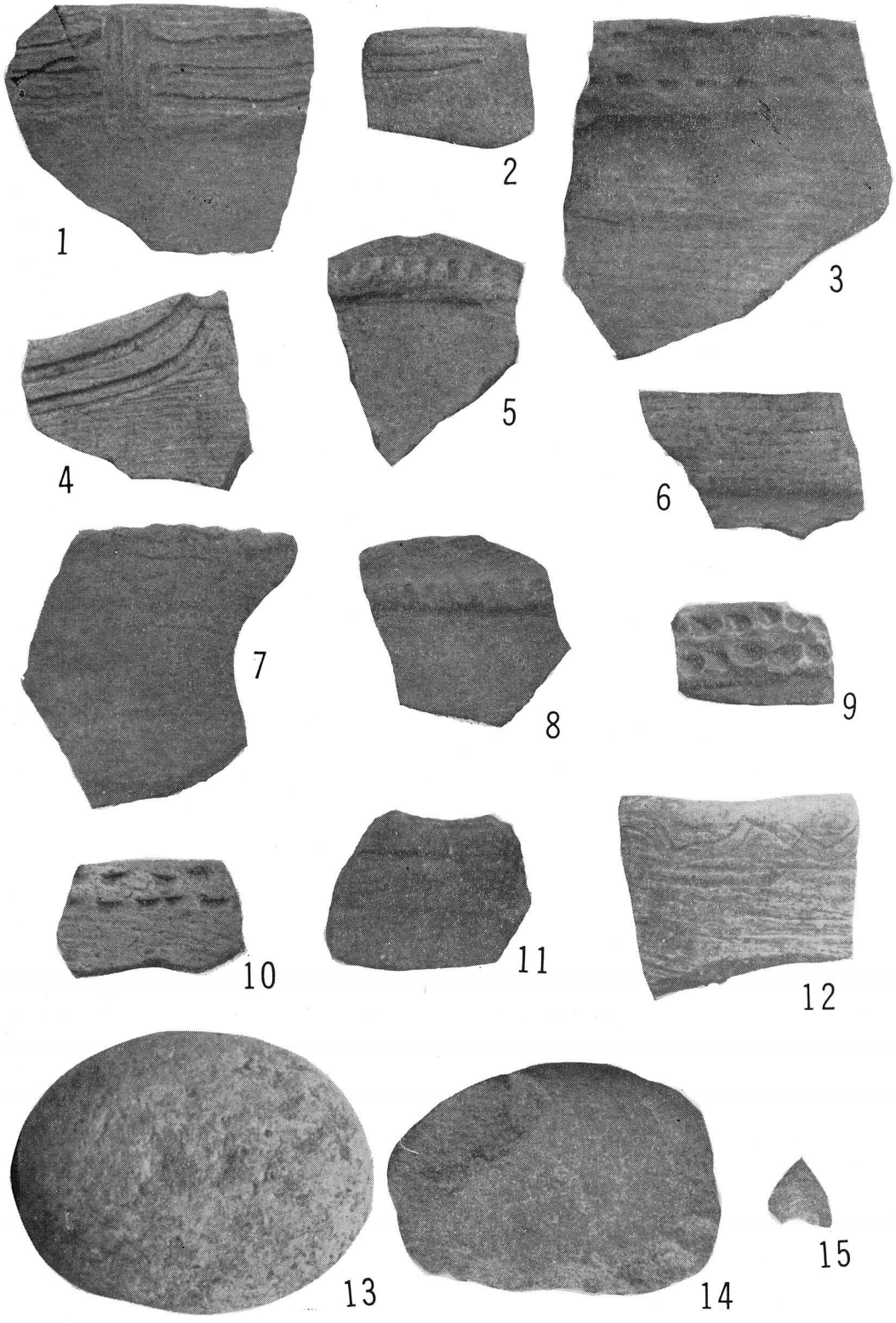
図版第六



1. 高御前遺跡第二地点（上段からみる）

2. 高御前遺跡第二地点（下段からみる）

図版第七



高御前遺跡第二地点の出土品

昭和46年5月30日 印刷
昭和46年6月15日 発行
〔非売品〕

柳が坪遺跡

編集発行
東海市横須賀町狐塚11番地
東海市教育委員会

印刷所
半田市板山町14の65
ツジ印刷所